16TH ANNUAL REPORT

FEST TOKYO

16期　活動報告書



FEST TOKYO 2026

目次

1．代表挨拶 … 3
2．団体概要 … 4-7
3．海外事業部 … 8-42
4．国内フォトワーク事業部 … 43-65
5．その他の活動 … 66-67
6．メンバーコラム … 68-81
7．最後に … 82-83

代表挨拶

この度は、学生国際協力NGO FEST TOKYO活動報告書をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

今期も、例年通り無事1年の活動をこの報告書に綴ることができ、皆様にお届けすることができたことを非常に嬉しく思います。

16期は前期よりも大幅にメンバー数が減り、活動の幅に悩むことが多くありました。海外事業部では、Blocklllに支援を開始してから3年目を迎え、住民との関係構築、そして支援地全体に還元できるような支援形態を常に考え活動していました。啓発活動では、国際協力に知識や興味のない人にどのように国際協力へ興味を抱いてもらえるかという問いに、この1年間向き合ってまいりました。常に自分たち自身のスタート地点を振り返りながら、試行錯誤を重ねてきました。

16期活動報告書は、何かをきっかけにFESTに興味を持ってくださった方、日頃からFESTを応援してくださっている皆様、これまでFESTを築いてこられた先輩方、これから先FESTとして活動していくメンバーや、16期として1年間走り抜けたメンバーなど、FESTに関わるすべての方々に向けた、私たちの1年間の記録です。
未熟ながらも悩み、もがき、試行錯誤を重ねながら、目の前の活動に全力で向き合ってきました。そんな16期の歩みが詰まった報告書となっています。ぜひ最後までご覧いただけると嬉しいです。

16期代表 武田郁



団体概要

1．団体理念

MISSION　**最良の国際協力を探究、実行、啓発する**

VISION　**世界から向こう見ずな支援をなくす**

VALUE
QUEST　懐疑的な探究・本質的な活動
FLEXIBLY　柔軟な思考・最適な行動
EVENLY　多様性の尊重・相補的な関係
YOUTHFULLY　自発的な挑戦・将来に亘る還元

FEST TOKYOは「現地のために、自立支援を行う団体」である。
現地のニーズに即していない、「自分たちのやりたい支援」が行われていることに
問題意識を感じ創設された。私たちは そのような「向こう見ずな支援」をなくすことを
VISIONに、最良の国際協力を探求、実行し、日本国内に啓発する事を MISSIONに活動している。

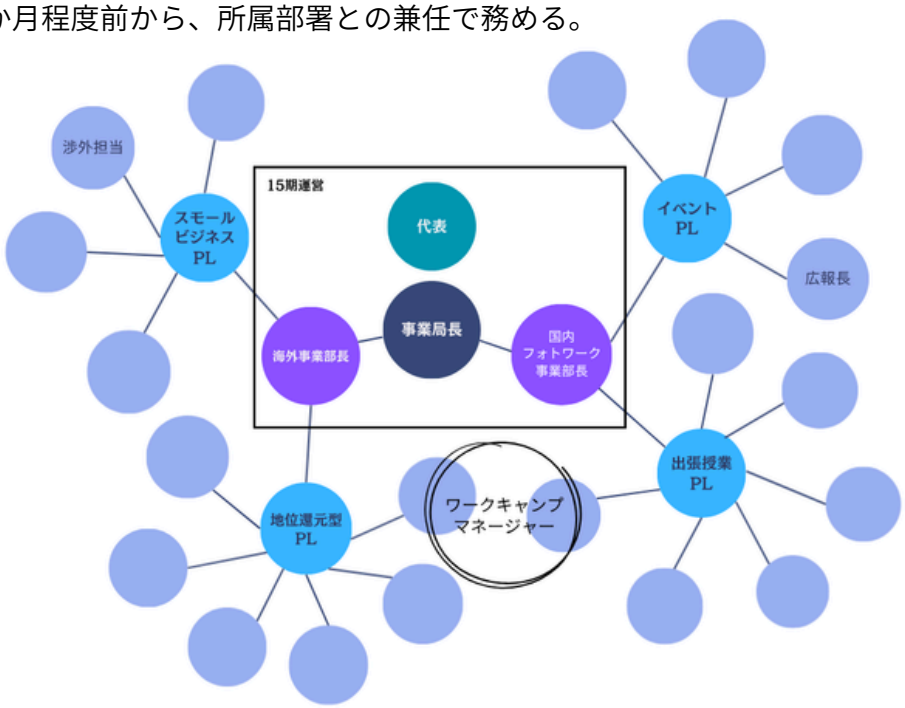
2．15期組織体制

海外事業部：支援地へ直接支援活動
【スモールビジネスプロジェクト班・地域還元型プロジェクト班】

国内フォトワーク事業部：国内での発信・啓発活動
【イベント班・出張授業班】

事務局：団体運営に関する活動
【渉外部・広報部】
※15期5月にて事務局を停止。広報は啓発を兼ねて国内フォトワーク事業部へ、
渉外はメンバーの村越を中心に運営で担当した。

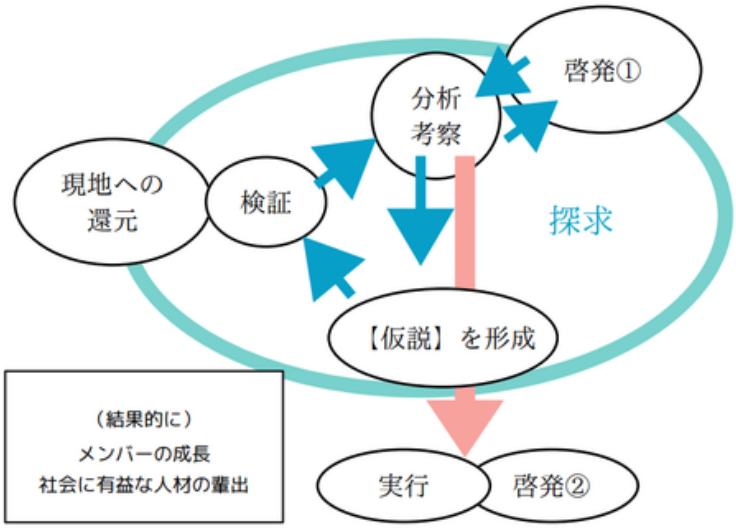
WCM(ワークキャンプマネージャー)：渡航前のホテル予約・各所対応から
渡航中の安全対策・経費精算まで責任者となり渡航中のFESTを支える活動
※WCMは渡航の2か月程度前から、所属部署との兼任で務める。



2025年6月作成

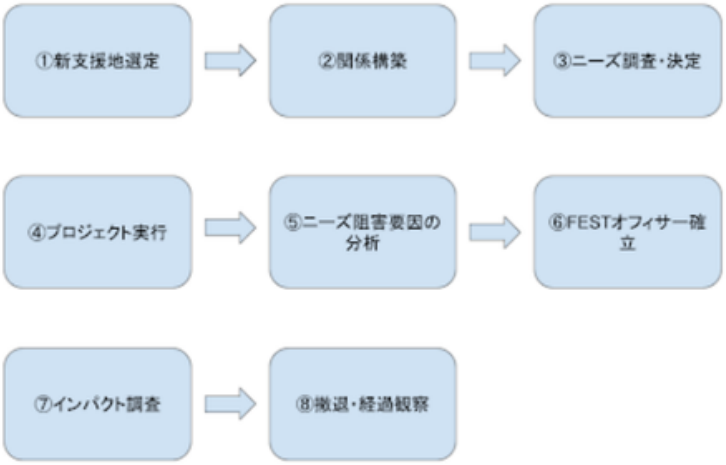
3．社会貢献モデル

団体理念中の「最良の国際協力を探究、実行、啓発する」にある、学生にできる最良の国際協力を探究するとは、現地で行った活動の経験だけでなく、国内でのミーティングや文献を読むこと、外部の方と実際に会って話すなど、様々な形が期待される。 実行するとはそういった活動の中で得た知識や経験、また各支援地の仮説から「最良の国際協力」 について考察を深め、外部の方からのフィードバックを得たのちに完成した支援のモデルを実行する、ということである。啓発においては、上記のように考えられた支援モデルを外部に啓発するのみならず、国内フォトワ ーク事業部が社会問題や国際協力について関心の無い層までをターゲットにした啓発活動を行っている。以上の探究、実行、啓発のサイクルが「社会貢献モデル」である。



4．仮説思考

私たちFESTの支援には「仮説思考」が欠かせない。1年間で2回という限られた渡航の中で得る 現地の情報を基に、スキルや知識が不十分である学生が、住民の解決したい問題（ニーズ）を把握し、またそのニーズが達成されない要因（阻害要因）に対して正確にアプローチする。このた めには仮説思考を用いて、阻害要因の特定をし、さらにその支援方法も模索しつつ、支援を進める。地域の現状や問題についての情報収集だけで何年もの時間がかかってしまうが、仮説思考を 用いることによって、地域の問題に対する解決方法の軸を決めることができ、より早く問題解決 にあたることができる。 上記の社会貢献モデルの仮説を使用する対象として、以下の２つがあ る。1つ目は、「住民の阻害要因」を特定することである。そして2つ目は Mission にもあるよう に、阻害要因に対する最良の国際協力の「方法」を特定することである。このようにして、以上 の2つの仮説を立て、最良の国際協力を探究、実行、啓発していく。もちろん、国際協力に一つの正解があるとは考えていない。地域や環境によってその手法は異なる。その中で学生にできる国際協力、または支援の中でも共通してこれが課題解決に向けてはより良いものがあるのではな いかというスタンスで模索しているのである。



5．主な支援の流れ

①支援地選定
FESTの支援の流れは、支援地を選定することから始まる。現地の行政機関であるバランガイ(Barangay)を訪問し、管轄地域を訪問して候補地調査を行うこと、プロジェクト(以降PJ)を実施することの許可を得る。FESTが提示する条件に合う支援地を探すためには、地域の問題・ニー ズを把握している行政機関が適しているからである。また、候補地調査における私たちの安全を担保するために、信頼のおける現地の人と行動を共にすることも重要である。FESTの条件に合う地域をバランガイから紹介してもらい、バランガイのスタッフと共に候補地調査を行う。調査 を行った地域の中から最も条件に合った地域を選ぶ。

②関係構築
住民との関わりは信頼関係を築くところから始まる。外部の人間は、住民達に警戒されてしまい、ニーズを聞き出したり、問題の根本を引き出せない。さらに私たちの支援には住民の協力が不可欠であり、信頼関係なしでは私たちの自立支援は成り立たない。そのため、ここへ何をしに来たのか、どんな支援をしようとしているのか、目的をしっかり伝える。住民とのコミュニケーションを重ねることによって、表面的ではない、本質的なニーズや問題の 構造を把握できる。

③ニーズ調査・決定
住民が抱えるニーズは、様々な問題から発生している。私たちは基本的に地域の抱える問題にアプローチしているので規模は地域レベルのニーズになる。ニーズ調査では、口頭や紙媒体で調査をする。 それぞれに調査の方法として意味があり、口頭では、質問を繰り返すなどしてニーズや問題について深く聞き出せる。紙媒体では、住民が時間をかけて地域の問題を考えることが出来る。こうして地域の問題に改めて向き合う機会を作ることで、ニーズの根本的解決の質をあげる。そして出たニーズを基に、どのニーズにアプローチするかを住民とともに集会の形で決定し、これから行うPJを決定する。（※13〜14期の2回にわたってニーズ調査を行っている。13期のニーズ調査の結果では度買い 要因を突き止めるための情報が不十分であると判断したため、14期の春渡航ではニーズ調査を重 点的に行うこととなった。

④FESTオフィサー確立
決定したニーズに取り組んでもらうため、 FESTオフィサーの確立を行う。この支援を通して、住民主体で問題解決を行えるようになっていくことが私たちの目標である。つまり、問題解決にあたる主役は、私たちではなく現地に住んでいる住民である。FESTオフィサーを確立する ために、住民集会などで住民に決めてもらう。 オフィサーには代表、副代表、監査、経理、秘書の主な 5 つの役職がある。地域には既存の組織がある場合が多く、彼らがFESTオフィサーとなる地域もある。FESTオフィサーは集会の進行などのプロジェクトの進行だけではなく、FESTとの連絡係も務める。こうしてFESTオフィサーと連携しながら、PJの成功をサポートする。

⑤ニーズや阻害要因の分析
FESTオフィサーを立ち上げた後、ニーズや阻害要因を分析する。分析をFEST内部で行うのとは別に、PJ内容を決める前に、この作業の重要性を住民に伝え、住民内でも分析を行ってもらう。住民が以降、自分達だけで持続的に問題解決をするためには、この問題分析は重要である。
阻害要因を根本まで洗い出せなければ、解決策も表面的になってしまうからである。

⑥プロジェクト(PJ)実行
FESTは、段階的な支援の流れを行う。初めからPJを全て住民に任せるのではなく、最初はFESTも住民と一緒にPJを運営する。住民のモチベーションを上げつつ、住民が主体的に自分たちの問題解決にあたれるような環境を整備する。前述したような 阻害要因の分析のサポートや、目標の明確化、住民集会の開催の促進をFESTオフィサーや地域住民との話し合いを重ねながら行う。
次のPJでは FESTがサポートしていた部分を任せ、住民主体を段階的に達成していく。阻害要因の解決やニーズの達成には、1つのPJだけでは十分でない場合もあり、その際は複数のPJを実施する。

⑦インパクト調査
PJを行うことによって、どんな問題が解決されたのか、 また住民はこの支援によって、阻害要因を取り除き、自分たちだけで問題解決を行うことができるようになったのか。これを評価し、次のPJに反省点や良かった点を生かす。

⑧撤退・経過観察
その後、私たちは撤退する。撤退した後も経過観察をして地域と関わり、PJの影響や、地域の現状はどのようになっているのか確認する。FESTは「支援団体がいなくなっても持続的に住民 だけで問題解決に取り組める」そんな環境を目指している。

海外事業部

目次

1. 支援地域Blocklllについて
2. 長期計画・阻害要因について
3. 春渡航報告
4. 夏渡航報告
5. 最後に

1．支援地域Blocklllについて

1-1．Blocklll概要

地域概要：フィリピン共和国セブ市
地域名：BlockIII
世帯数：約180世帯
BlockIIIは、フィリピンセブ市サワンカレロ・バランガイ内に位置する、FESTにとって6番目の支援地である。13期春渡航（2023年3月）からFESTとの交流が始まり、現在まで継続的に関わりを続けている。FESTとの関係性は良好で、地域を歩いていると住民が気さくに声をかけてくれたり、子どもたちが集まってきたりするなど、温かく親しみやすい雰囲気がある。世帯数が多いことから、渡航のたびに初めて顔を合わせる住民がいる一方、これまでの交流を通してFESTメンバーの名前や顔を覚えてくれている住民も多い。また、住民同士の関わりも強く、日常的に声を掛け合ったり、助け合ったりする姿が見られる。地域全体として和気あいあいとした雰囲気があり、住民同士のつながりが感じられる地域である。





1-2．よく出る単語集

・バランガイ（Barangay）キャプテン、カウンセラー
フィリピンの最小行政区で、日本の町内会や自治体に相当する。地域住民の生活や治安、行政サービスを担う基礎的な組織である。現在FESTが支援している地区にもバランガイがあり、キャプテンやカウンセラーなどの役職が設けられている。



・サリサリストア
フィリピンの住宅街に多い小規模雑貨店。お菓子や日用品を小分けで販売し、
庶民の生活に密着した存在。



・カルボンマーケット（Carbon Market）
セブ市にある大規模市場。
鮮魚や野菜、肉などを大量かつ安価に仕入れられる卸売市場として有名。



・フィッシュマーケット
魚専門の市場。漁港に近く、新鮮な魚介類を安価で仕入れられる場所として、地域の飲食店に重要な役割を果たしている。



・スモールビジネス
個人や家族の単位で営まれている小規模事業である。フィリピンでは屋外での小さな屋台や移動販売など、
身近な道路や自宅前のスペースを利用して、比較的少ない初期投資でビジネスを始めることができる。

・スモビジPJ
FESTが実施しているスモールビジネスプロジェクトの略称である。地域でスモールビジネスを始めたい住民やすでに行っている住民が、安定した収入を得られるようになるための支援を行うプロジェクトである。スモールビジネスプロジェクトにより、ビジネス用とプライベート用の2つの財布を使用して収支を管理する「財布分け」が最も効果的であることが分かり、現在はそれを地域全体に広めるための活動を行っている。

1-3．BlockIII支援活動の流れ

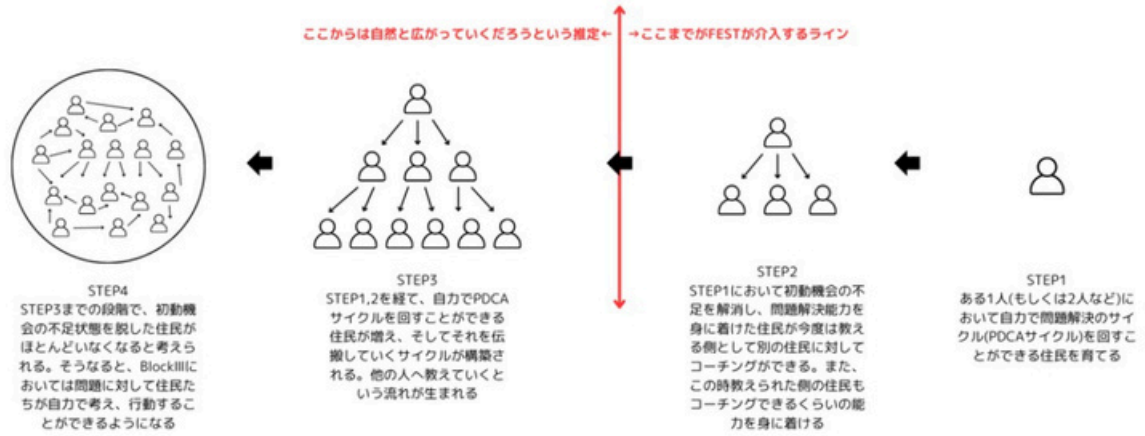
年	期	時期	主な活動
2023	13期	春渡航	支援地域の選定を行った。
		夏渡航	サワンカレロバランガイのBlockIIIの支援を正式に開始。支援地決定の挨拶、住民との交流プロジェクト、簡易的なニーズ調査、住民へのインタビューを通して地域理解を深め、地域が抱える課題について情報収集を行った。
2024	14期	春渡航	長期的な課題解決のために不足していた情報を再度収集した。
		夏渡航	スモビジPJを開始。15人の住民と「安定した収入を得ること」を目標に、事業立案から開業までの支援を進めた。
2025	15期	春渡航	住民の事業継続に向けたヒアリング、市場調査、資金提供を実施。あわせて、地域全体の課題解決に向けた地域還元型プロジェクトを始動した。
		夏渡航	事業の課題特定や改善に向けた調査を実施。地域還元型プロジェクトでは、ニーズ調査や8leadersに関する調査を行った。

2．長期計画・阻害要因について

2-4．長期計画

【阻害要因について】
今回のBlockIIIにおける阻害要因は「初動機会の不足」であると14期に仮説を立てた。「初動機会の不足」とは、「理想の状態・あるべき状態」は住民自身も分かってはいるが、どのようにして現状からそこに「アクセス」できるようになるかが分からない、もしくはアクセスする方法は分かっているが、なんらかの理由により行動を起こさない（考えられる理由としては子育て、資金不足、介護、成功する保証がないため不安etc）状態であると考える。例えば、教育やそれに伴う学歴の必要性や衛生環境を整える必要性については理解しているものの、現状としてはその行動が起こせていないなどである。また、この「初動機会の不足」の主語(すなわち誰の初動機会の不足か)は「個人」である。そのため個人の初動機会の不足を解消することが私たちに求められる行動である。

【プロジェクトについて】
まずプロジェクトの一通りのフローを住民とFESTで一緒に行う。そこで経験を積みながらFESTの介入度を減らしていき、住民自身でフローを行える状態を目指す。住民が目標や課題に対し、自分の力で道筋を立て、達成する力を身につけると共に、成功体験を作ることで、住民がビジョンを持てるようにサポートする。
その後、地域の中でコーチングサイクルを構築することである。BlockIII個々人全員の初動機会の不足を解決することは現実的に考えて難しい。しかし、誰か1人の初動機会の不足を解消しただけでは、地域全体の問題の解決にはならない。そのため、まずは数名の住民に対して初動機会を提供し、その住民がコーチングできる能力を身につけるというサイクルを構築することがFESTの役割であると考えている。
* プロジェクトごとに、達成までのステップを4段階に分ける



スモビジPJ全体の目的（2024年夏渡航〜の経緯）

時期	内容
2023年	BlockIII地区を支援地として選定。「安定した収入を得ること」の困難さが課題として浮かび上がり、スモビジPJの構想が生まれた。
2024年夏渡航	プロジェクト始動。参加意欲のある住民から事業立案書を回収し、実現可能性を精査して15人の住民を選定。「安定した収入を得ること」を目標に支援体制を整えた。
2025年春渡航	15人のうち複数名の参加者に対して実際に支援を開始。立案書の段階から具体的な事業の立ち上げに向けた伴走支援を実施。
2025年夏渡航	新規の立ち上げ支援に加え、既にビジネスを始めていた参加者の現在進行中のビジネスの改善を目指す取り組みを実施。
検証（成果）	初動の機会提供によりビジネスが軌道に乗った参加者が確認され、「初動機会の不足」が阻害要因であることが検証された。同時に、スモビジPJのみでは部分的にしかアプローチできていないことも判明した。
2026年春渡航	各参加者のプロジェクトにおける立ち位置を確認し、今後の支援内容に反映する。ビジネスを始めるまでに至らなかった参加者への支援活動も実施する。
2026年夏渡航	目標を達成した参加者が、自身の経験やビジネス改善の手法を地域住民へ伝える「伝播」の活動を実施。支援される側から地域へ還元する担い手への転換が見られた。
今後（来春渡航）	「初動機会の不足」への多方面からのアプローチを目指し、新PJ始動を計画する。今渡航では新PJに必要な情報の詳細調査を実施した。

3．春渡航報告

3-1．目的・目標

目的	スモビジPJにおける各参加者の継続意思を確認する 各参加者の現段階でのPJ目標達成度を確認する
目標	①参加者全員に継続意思調査を実施する ②継続意思がある参加者に財布分けを実施する ③新組織との連絡を確実に取れるようする

3-2．継続意思調査

調査の目的

スモビジPJの続行意思と参加者のニーズを確認する。前回の渡航では資金援助を求める声が多く、参加者の期待とFESTが目指す支援の方向性に乖離があると感じた。そのため、プロジェクトの目的や今後の活動方針（NPOとの連携など）を共有し、金銭的支援がなくても続行する意思があるかを確認する。また、ビジネスの改善・発展に向けて参加者自身が抱える課題や、FESTに求める支援について聞き取り、現地のニーズに合った活動につなげる。
さらに、スモビジPJへの参加によってビジネスや生活にどのような変化があったのかを確認する。各参加者の収入状況や課題を把握し、PJの目標である「安定した収益を得る」に対して、現在どの段階にいるのかを整理することで、今後必要な支援や取り組みを検討する。

調査の進め方

1. スモビジPJの目的説明
　スモビジPJは「安定した収入が得られるように、ビジネスを改善することを目指すプロジェクト」であることを説明する。金銭支援を目的とした参加を防ぐ目的で実施する。

2.スモビジPJでこれまで実施してきた事の説明
　スモビジPJ開始から今まで行ってきた、金銭支援や市場調査、改善策提案などの内容
を説明する。

3.今後のスモビジPJで実施する内容の説明
　今後のスモビジPJで実施しようと考えている内容を説明する。今後の実施内容について、PJへの参加継続の意思を確認するため参加者にもあらかじめ共有する。具体的には、財布分けや出納帳の取り組み、可能性としてNPOやNGOとの連携も考えていることを伝える。

4.今後もスモビジPJを続行する意思があるか確認する
　1～3を説明したうえで、スモビジPJへの参加を続行するかを確認する。

5.スモビジPJに参加したことでどのような変化があったか質問する
　スモビジPJ開始当初から現在の間で、参加者の生活にどのような影響があったかのヒアリングを通して参加者の視点で確かめる。収入面・生活面・精神面の3つの側面の変化を見る。FESTが口頭で質問をし、FESTが回答を記録する。この調査の結果をもとに、FESTが用意した質問で参加者それぞれの進捗度合を評価する。貯蓄・収支管理に関する質問は、財布分けを実施後も質問する

6.ビジネスで困っていること、FESTにしてもらいたいことなどを質問する
 ビジネスにおける課題や悩みはFESTよりも本人のほうが自覚していると考えられるため、どのようなことをFESTに求めているかを質問する。回答内容を検討し、今後の支援内容に生かしたいと考えている

参加者ごとの結果

住民	継続意思	進捗状況
住民I	継続意思あり	収入面ではPJに参加する前に比べ増加した。ビジネスが以前よりも安定したと感じており、顧客数は増加し、資本も増えたと話していた。また生活面では、緊急時の対応として医療費などのための貯蓄を行っており、台風で壊れた家を修理できるようにもなったと回答があった。
住民M	継続意思あり	実際にレシートと小銭、筆算をしたメモをしている様子を確認することができた。緊急時の対応として息子が体調を崩した際に薬を購入することができたと話していた。
住民E	継続意思あり	新たにシュウマイ屋を自身のビジネスにしていた。スモビジPJ参加前後で収入が増え、欲しいものが買えるようになり、より生活が安定したと感じるという回答を得られた。
住民J	継続意思あり	スモビジPJに参加したことにより、収入が安定し、客が6〜10人ほど増えたと回答した。FESTが開業から支援していたサリサリストアは2024年春以降営業できていないことが確認できた。現在は衣服の修繕の仕事に就いていることがわかった。貯蓄額がいくら必要か把握しており、既に貯蓄を始めていることがわかった。
住民T	継続意思あり	娘の学費を賄うためチキン屋を開業したいという意思は前回渡航から変わっていなかったため、FESTとともに企画書を作成した。金銭支援の条件を満たす額の貯蓄が無かったが、最低限必要な物資を支援し揃えたうえで、継続して開業できるかどうかを、支援継続の条件とした。カルボンマーケットへ買い出しに同行し、最低限必要な物資を揃えた。買い出しの翌日から継続して開業している様子を確認できた。開業後、財布分けのやり方を説明した。
住民S	継続意思あり	住民Sに関して、メッセンジャーと対面で継続意思調査を行い、継続意思を確認したが、マッサージ屋の常連からの支援を受けると伝えられ、スモビジPJとして金銭面等の初動機会に対する支援は行わないこととなった。
住民P	継続意思なし	以前から伝えられていたパン屋の営業は、営業を取り締まっているグループから抜けてパン屋を営業することは不可能になったことから継続しないこととなった。

3-3．財布分け施策継続確認

経緯

昨年度の夏渡航で実施した財布分け施策を継続しているかの確認をするとともに、財布分け施策を行っていない住民に財布分け施策の説明を行った。

財布分けの目的

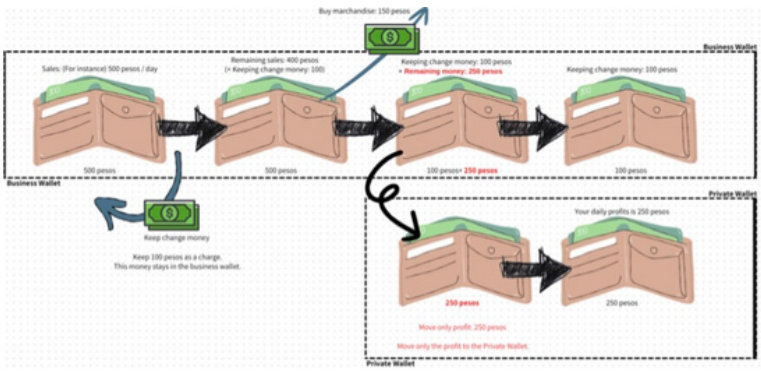
参加者が私用とビジネス用のお金を分けて管理し、私費・ビジネスにおける収入・支出を区別する習慣を身につけること。

財布分けの内容

収支を目に見える形にするため、財布を「私用」「ビジネス用」の2つに分ける。仕入費用は「売上 − お釣り（＝残金）」の範囲内で行うことを原則とする。

お金の分け方（例）

項目	金額	内容
売上	10000円	営業によって得られた金額
お釣り	-2000円	あらかじめ決めた固定額を確保（毎回同額）
残金	8000円	売上-お釣り（その日の残金）
仕入れ	-3000円	残金の範囲内で支払う
最終残額	5000円	実質的な利益。私用資金や次回の商売資金として扱う。



実際に使用した説明資料

現地での流れ

1. 口頭での説明：参加者の家庭を訪問し、財布分けの目的・効果・やり方を資料で説明する。

2.実演と実践：FESTが実際のお金を使って実演し、その場で参加者にやってもらった。

3. 財布を渡す：財布を2つ手渡した。参加者がもともと2つ以上持っている場合はその財布を使ってもらい、1つしかない場合はビジネス用に1つ渡した。

4. 継続の確認：次の営業日後に、継続できているか確認する。

5. 経過確認：約2営業日ごとに確認する。春渡航中は計3回確認した。

6. 最終確認：帰国前の最終の経過確認で、FESTが日本に帰ってもこの財布分けを続けてほしい旨を伝えた。

継続確認での対応

【財布分けを継続的に行っている場合】
1. 今後も継続してほしい旨を伝える。
2. 不明点がないか聞き、あれば説明して解決を試みる。
3. 次に会う予定を決める。
4. 次に会うまで財布分けを継続してもらう。

【財布分けがうまくいっていない場合】
1. 不明点・不満がないか聞く。
2. 不明点に触れつつ、再び説明・実演する。
3. 参加者に実践してもらう。
4. 次の営業日後に経過を確認する。

住民別の結果

住民	**財布分けの状況**	**進捗状況**
住民I	施策は実施せず （既に自身で実施していた）	財布分けのおかげで、週の収入が約800ペソから約6,000～7,000ペソに増加。貯金も増加
住民M	施策は実施せず （既に自身で実施していた）	収支を記録して管理していた。財布分けにより緊急時用の貯蓄ができ、対応できたことがわかった。
住民E	○（独自に実施済み。貯蓄目的の説明をした）	収入が5,000ペソ増加。
住民J	説明〇／経過確認〇（1回）	財布を使い分けていなかったため、財布を渡して説明
住民T	説明〇（確認はできていない）	チキン屋を開業。開業後に財布分けのやり方を説明

3-4．目標達成度の評価

評価指標

以下の指標を用いて、参加者それぞれの目標の達成度を測った。財布分けを実施した後に測定した。
目標は、以下の指標にある通り**①収支管理の仕方を身に付ける、②ビジネスの基本的要素を満たす、③貯蓄をする能力を身に付ける**の3つである。

①収支管理の仕方を身に付ける　（6点満点　それぞれ1点以上で達成とみなす）

- 財布分けができている(＝ビジネス用と私用を分けて管理している）（財布分けが全くできていない:0、たまに財布分けをしている:1、毎回財布わけしている:2）
- 売上を把握できている（売上を全く把握していない:0、たまに把握する:1、毎回把握している:2）
- 仕入額を把握できている（仕入額を全く把握していない:0、たまに把握する:1、毎回把握している:2）

②ビジネスの基本的要素を満たす（6点満点6点で達成とみなす）

- 商品がある
- 販路が確立している
- 仕入先がある
- ターゲットが存在する
- 適切な価格設定になっている
- 差別化できている/需要が高い商品を扱っている

③貯蓄をする能力を身に付ける　（4点満点4点で達成とみなす）

- 貯蓄の必要性を理解している
- 必要金額を把握している
- 貯蓄の目的がある
- 計画に基づいて貯金をしている

評価方法

現地でFESTメンバーが目視で、または参加者に質問して調査した結果を評価材料とする。**②ビジネスの基本的要素を満たす**、**③貯蓄をする能力を身に付けるに限り**、**進捗状況の調査**の結果も評価材料とした。
以下に①～③の個別の詳しい評価方法を記した。
①収支管理の仕方を身に付ける（**d.進捗状況の調査**の調査結果も評価材料とする。)

- 財布分け（ビジネス用と私用を分けて管理している)

財布分けができているか目視し、さらに詳しく質問する。ビジネス用と私用が混同せず、区別して使用していることを確認できた場合チェックを付ける。

- 売上・仕入額の把握

ヒアリング調査を実施し、具体的な金額・把握方法を聞く。必ずしも記録として残していなくても、質問に答えられればよいとする。

②ビジネスの基本的要素を満たす
調査を担当するメンバーが、調査結果(例えば各商品の価格のメモ)を持ち帰り、それをもとにメンバー全員でチェックが付くかどうか判断する。
③貯蓄をする能力を身に付ける（**d.進捗状況の調査**の調査結果も評価材料とする。)
ヒアリング調査を通じて評価を行う。

参加者ごとの達成度まとめ

住民	達成度評価の結果
住民I	①収支管理の仕方を身に付ける　6/6 ②ビジネスの基本要素を満たす　6/6 ③貯蓄をする能力を身に付ける　4/4
住民M	①収支管理の仕方を身に付ける　6/6 ②ビジネスの基本要素を満たす　6/6 ③貯蓄をする能力を身に付ける　4/4
住民E	①収支管理の仕方を身に付ける　6/6 ②ビジネスの基本要素を満たす　6/6 ③貯蓄をする能力を身に付ける　4/4
住民J	①収支管理の仕方を身に付ける　2/6 ②ビジネスの基本要素を満たす　2/6 ③貯蓄をする能力を身に付ける　4/4
住民T	①収支管理の仕方を身に付ける　6/6 ②ビジネスの基本要素を満たす　6/6 ③貯蓄をする能力を身に付ける　3/4
住民S	①収支管理の仕方を身に付ける　0/6 ②ビジネスの基本要素を満たす　0/6 ③貯蓄をする能力を身に付ける　2/4

3-5．スモビジPJで開業していない住民への対応

2025年夏渡航終了時の時点で事業を開始できていない住民Tおよび住民Sに対して、再度開業に向けた対応を取った。

企画書提出

1.企画書の提出について
以下のような質問を現地で実際に回答してもらった。

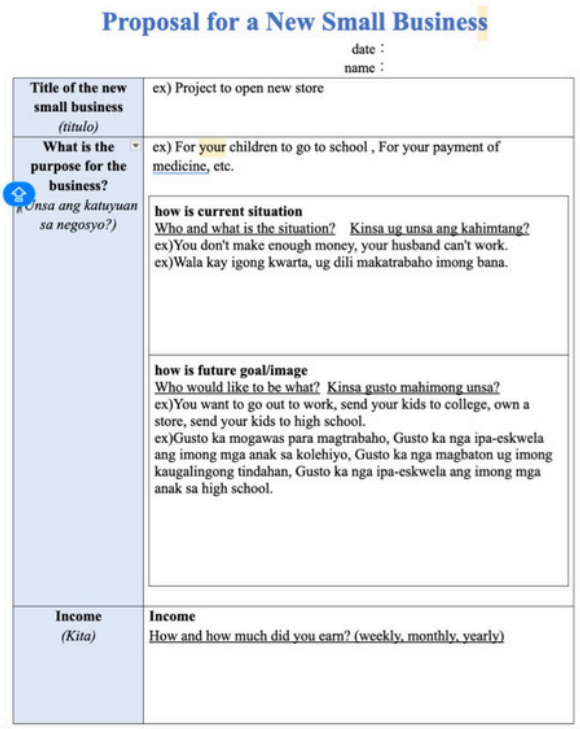
【実際に使用した質問項目】
①Business idea & reason
Q: What business do you want to do?
（どんなビジネスをやりたいですか？）
Q: Why did you choose this business?
（このビジネスを選んだ理由はなんですか？）

②Detail own business
Q: When do you want to start the business?
（いつ開業したいですか？）
Q: Where will you sell your product or service?
（どこで商品を売りたいですか？）
Q: What will you sell?
（何を売りたいですか？）
Q:Who is your customer?
（顧客はだれですか？）
Q: How many hours per week do you work?
（週にどのくらい働きますか？）
Q: How much money do you want to earn per week or month?
（週または月にどのくらい稼ぎたいですか？）
Q: Is there a person who you work your own business with? Who are they?
（あなたの他にビジネスのサポートをしてくれる人はいますか？その人はどんな人ですか？）

③Until start own business
Q: What do you need until you start your business?
（開業までに必要なものは何ですか？）
Q: What costs are needed?（Equipment, materials and daily needs.）
（開業するための費用は必要ですか？）
Q: How much money can you invest in starting your business by yourself?
（開業にいくら出資できますか？）
Q: What risk do you have regarding your own business for now?（Sales and else.）
（現在で開業する上でのリスクはありますか？）

④Do you have anything else that you want to share?
（その他に伝えておきたいことはありますか？）

【資料2】2025年の春渡航で使用した企画書の一部



Proposal for a New Small Business

date：
name：

Title of the new small business *(titulo)*	ex) Project to open new store
What is the purpose for the business? *(Unsa ang katuyuan sa negosyo?)*	ex) For your children to go to school , For your payment of medicine, etc. **how is current situation** Who and what is the situation? Kinsa ug unsa ang kahimtang? ex)You don't make enough money, your husband can't work. ex)Wala kay igong kwarta, ug dili makatrabaho imong bana. **how is future goal/image** Who would like to be what? Kinsa gusto mahimong unsa? ex)You want to go out to work, send your kids to college, own a store, send your kids to high school. ex)Gusto ka mogawas para magtrabaho, Gusto ka nga ipa-eskwela ang imong mga anak sa kolehiyo, Gusto ka nga magbaton ug imong kaugalingong tindahan, Gusto ka nga ipa-eskwela ang imong mga anak sa high school.
Income *(Kita)*	**Income** How and how much did you earn? (weekly, monthly, yearly)

企画書通過基準

2025年の春渡航で使用した『審査項目』を元に企画書の合否を判断した。

以下の9項目のうち6項目満たせば合格とする
- 目的が書かれている
- 収入欄に記載がある(incomeに記載があればよい、savingのみは×)
- 支出欄に記載がある
- 週3日以上、もしくは週24時間以上ある
- 仕入先の具体的な店名(スーパーマーケットは×）が書かれている
- 最低ひとつはリスクが書かれている
- Budget欄のcostが適切な金額で書かれている
- 50%を集める具体的な方法がある
- Facebookなど連絡先が記載されている

【企画書通過後のフロー（企画書通過後から開業まで)】
2025年の春渡航で使用した『スモビジPJ夏渡航通過者への対応』をもとに開業に向けた取り組みを実施した。企画書通過者にはヒアリングを行い、開業までにかかる日数および確認事項を共有し、金銭支援を行えるかどうかの最終確認を実施した。

流れ

① 開業の目処を立てる
質問1：仕入のタイミング
　選択1：先に貯蓄をしてから大量に仕入る
　選択2：少ない貯蓄か少量の仕入をして、徐々に仕入数を増やしていく
質問2：企画書で記載した『自身が出資できる額』の有無の確認
　選択1：貯まっている、あるいは近日に確保できる目処がある。
　※（⇨質問3へ）
　選択2：貯まっていない。
（⇨FESTが納得できる理由の場合：一緒に解決を試みる）
（⇨納得できない理由の場合：ビジネスの廃止）
質問3：販売場所の確保ができているか
選択1：できている、あるいは近日に確保できる目処がある。
※（⇨確認へ）
選択2：できていない。
（⇨販売場所の選定を共に考え、陳列に必要な棚や場所を確保する）
※本人の証言だけではなく、客観的な確信を得られる証拠があること。

②開業前の最終確認および同意書の記載
⇨対象者ごとに、対面で重要な確認事項を再度共有
開業前の最終確認

- 今後の計画
- 定期的なMTGを実施をする旨
- 次のMTGの日程決め（対面または遠隔）
- FESTの介入度
- プロジェクト脱落の基準
- 開業と運営にかかる最終的な金額
- FESTが支給する金額をFESTと対象

同意書の記載
上記、FESTの計画に同意を得た後、責任を持ってプロジェクトに取り組んでいただくための確約を得る。

③金銭を支援をした後、開業

【支援金額について】
支援金額は、2025年春渡航時の実績を参考にした上で、開業に必要な金額の最大50%を提供する(※1)。また、既に資金を提供している対象者と条件を近づけるために、事前に定めた分配方式を用いた。

※1.支給金額は暫定的に最大50%(最大3600ペソ)とし、対象者が求める物資の購入などに投じる。ただし、開業に必要な金額およびFESTの予算状況を踏まえ、調整するものとする。

【資料】2025年春渡航で行った1回目の金銭支援額

	購入物	購入総額 (ペソ)	支援額 (ペソ)	支援比率 (住民：FEST)	開店状況
住民I	子供服・ズボン・布	3,700	2,400	3:7	開店済み
住民E	飲み物(コーラ・スプライトなど)	1,465	1,465	0:10	開店済み
住民J.M	スナックなど	1,246	1,246	0:10	開店済み
住民J.P	たばこ・飲み物・スナック	4,500	2,800	4:6	開店済み
住民J	スナック・日用品	5,098	3,600	3:7	開店準備中
住民B	ベーカリー開業資金	1,800	1,800	0:10	開店準備中

（抜粋）：15期渡航報告書, 21ページ

住民T

企画書作成
FESTと共に企画書の作成を行った。

ビジネス内容	チキン屋
ビジネスの目的・目標	娘の勉強や仕事を手伝いながら、ビジネスを継続して収入を得ること
貯蓄状況	ビジネスを開始していないため、貯蓄はない
貯蓄目的	娘の教育費や生活費の確保
販売商品	チキン、ポーク、ライスなど
仕入れ先	カルボンマーケット
営業日時	毎日朝9時から19時
顧客	周辺に住む住民
必要材料	テーブル、ガスコンロ、チキン、ポーク、ライス

企画書通過基準の結果
✅目的が書かれている
✅収入欄に記載がある
✅支出欄に記載がある
✅週3日以上、もしくは週24時間以上ある
✅仕入れ先の具体的な店名
❌最低ひとつはリスクが書かれている
✅Budget蘭のcostが適切な金額で書かれている
❌50%を集める具体的な方法がある

企画書通過後
通過後の流れに沿って開業した。買い出しでは一緒にカルボンマーケットに同行し、テーブルと最初の営業で必要な食材を購入した。





住民S

Ebikeバッテリービジネスを企画していたが財布分け支援のみ継続した。
2026春渡航開始時点で、住民Sは訪問形式のマッサージ屋を営んでいるが、収入が安定しないため、Ebikeのバッテリービジネスを行いたいということであった。そのため、企画書を再度記入し、企画書を元に話し合いを行った結果、Ebikeに必要な充電用のケーブルをFEST側から支援することが決定した。しかし、現在営んでいる訪問形式のマッサージ屋での常連からFESTよりも良い条件でビジネス開業を支援したいと伝えられたため、そちらから支援を受けたいという旨を伝えられ、スモビジPJとして金銭面等の初動機械に対しての支援は行わないことになった。最終的に、財布分けに関しては住民Sの希望があり、財布分けの施策のみを実施した。

3-6.住民Iのロックミシン購入について

経緯

住民Iは、昨年夏渡航の際、あるFESTメンバーから「一定額を貯蓄できたらロックミシンをプレゼントする」と伝えられたと話しており、その言葉を信じて貯蓄を続けていた。その額は約8,000ペソに上る。ミシンをプレゼントすると話した事実はないが、この認識のずれを放置すると、住民Iや現地の方との関係構築に大きな懸念が残ると考え、話し合いの場を設けた。
その結果、住民Iにはこれまで貯蓄を続けていた事実があり、返済が可能だと考えられたことから、関係悪化の防止、ビジネス成長を目的として、今回の渡航でロックミシン購入のための資金を融資することを決定した。

貸付内容

ミシン購入費用の合計は24,000ペソで、負担の内訳は次のとおりである。
・住民I負担額:4,000ペソ
・FEST融資額:20,000ペソ
住民Iの負担額を4,000ペソとしたのは、渡航期間中に手元から出せる金額がこの額だったためである。

返済計画

融資額20,000ペソは、2027年春渡航(2〜3月頃)までの2回の渡航で、10,000ペソずつ返済してもらう予定である。

保証人制度

借受人が病気や怪我などで支払いが難しくなった場合に、責任を持って支払いを請け負う保証人の制度を設けた。保証人には制度の内容を十分に理解してもらい、同意書にサインをもらったうえでミシンの購入に向かった。



3-7．お菓子釣り

概要

子どもを対象にしたイベントを実施することで、子どもだけでなく大人の住民も自然に集まる環境を作ることができると考え実施した。子どもをきっかけに、住民全体が参加しやすい空気を作り、Block III全体とFESTの関係性を広げて行くことを狙いとした。

良かった点

大人の住民に手伝ってもらい、また参加してもらうことができた。獲得したお菓子を食べる時間を設けた事でその場でゴミの回収ができた。

改善点

平日だったため、未就学児が多く学校に行っている子供達が遅れて参加する形になってしまった。ルール説明が文字を読めない子が多かったため工夫が必要だった。竿に使用した割り箸が子供の遊び道具になってしまった。





3-8.春渡航目的・目標に対する評価

目的①：スモビジPJにおける各参加者の継続意思を確認する
住民Pを除く6名の継続意思を確認し、それぞれの意思や今後の課題を把握することができた。また、住民Sのように外部からの支援を希望するケースも確認でき、今後の支援方針を検討するための情報を得られた。

目的②：各参加者の現段階でのPJ目標達成度を確認する
収支管理・ビジネスの基本要素・貯蓄能力の3つの指標を用いて、参加者ごとの達成度を評価した。その結果、参加者間の進捗状況の違いや、今後支援が必要な点を把握することができた。

目標①：参加者全員に継続意思調査を実施する
対象者への聞き取りを行い、継続意思を確認することができた。継続を希望する住民には今後の活動方針を共有し、継続を希望しない住民についても、その理由を把握できた。

目標②：継続意思がある参加者に財布分けを実施する
既に財布分けを実践している住民を除き、対象者への説明や実演を行った。住民Tの開業支援後にも財布分けを説明するなど、収支管理の習慣化に向けた取り組みを実施した。一方、一部の住民については継続状況の確認が十分にできておらず、今後も経過を確認する必要がある。

目標③：新組織との連絡を確実に取れるようにする
新組織との連絡に関しては、通信状況や新組織側の管理体制などが原因で確実に取れるようにできなかった。

4．夏渡航報告

4-1．目的・目標

目的	①スモールビジネスPJの学びを参加者（α）がBlockIII全体へ伝播し、住民が主体となってビジネスを発展させられる仕組みを構築する。 ②住民のニーズに対して、新PJとしてアプローチする基盤を固める。
目標	①に対する目標 参加者（α）がコーチング能力を身に着け、実際にBlockIIIの住民に対してコーチングする。 ②に対する目標 Blocklllの住民やバランガイスタッフに対して、 他のニーズがあるか、またその詳細について調査する。

4-2．伝播の概要

今渡航では、スモビジPJの伝播の段階を行った。昨春にスモビジPJの終了基準に達した住民I、住民M、住民Eが財布分けをBlockIIIの住民に伝播させることを目的とした。

またFESTとの練習だけの判断ではなく、実際にコーチングを受けた対象者が財布分けについて理解できたかどうかも、目標達成指標の一つとした。
ワークショップ後の対象者の自宅を訪問する際に、FESTが定める4段階のうち、どの段階であるかを評価し、対象者の財布分けへの理解度を測った。下記の「4段階の詳細」の中で、対象者のうち過半数が3以上の段階であれば達成とした。

<u>4段階の詳細</u>
4.財布分けについて完璧に理解しており、すぐに財布分けを開始できる
3.財布分けの本質は理解しているが、細かい部分が理解できていない
2.財布分けの本質を理解できていない部分がある
1.財布分けについて、全く理解できていない

※財布分けの本質とは、プライベート用の財布とビジネス用の財布を分けることによって、適切な収支管理と利益の明確な把握が可能になり、計画的な貯蓄ができるようになることである。

また、本資料で使用する主要な用語は以下の通りである。

参加者(a)＝住民I
受講者＝ワークショップを受けるBlockIIIの住民(下記の対象者も含む)
対象者＝コーチングを受けるBlockIIIの住民

【伝播の流れ】

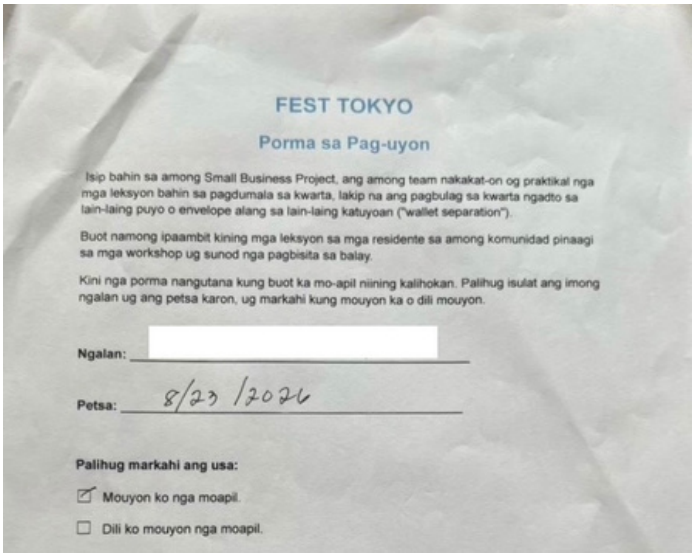
- 財布分けの伝播は以下の手順で行った。
- 住民I、住民M、住民E(ワークショップ・個別訪問)への参加可否を確認する。
- 参加者(a)とFEST作成マニュアルの読み合わせを行い、意見をもらう。
- 参加者(a)の意見を基に、現地作成マニュアルを作成する。
- 完成させた現地作成マニュアルを参加者(a)に読んでもらう。
- 参加者(a)のコーチング練習を行う。
- BlockIIIの住民にワークショップの宣伝を行う。
- ワークショップを行う。
- 受講者の財布分けの経過観察を行う。

【流れの詳細】

1.住民I、住民M、住民Eに伝播への参加可否を確認する

3人に、今渡航で財布分けをBlockIIIの住民に伝播させるためにワークショップや個別訪問を行う旨を説明したところ、3人全員から伝播同意書のサインをもらった。しかし、住民Mは、マニュアル読み合わせを行うことができたがワークショップで話したくないとのことであった。住民Eは、マニュアル読み合わせの予定が合わず、伝播の参加は断念することとした。

【実際に記入してもらった同意書】



FEST TOKYO

Porma sa Pag-uyon

Isip bahin sa among Small Business Project, ang among team nakakat-on og praktikal nga mga leksyon bahin sa pagdumala sa kwarta, lakip na ang pagbulag sa kwarta ngadto sa lain-laing puyo o envelope alang sa lain-laing katuyoan ("wallet separation").

Buot namong ipaambit kining mga leksyon sa mga residente sa among komunidad pinaagi sa mga workshop ug sunod nga pagbisita sa balay.

Kini nga porma nangutana kung buot ka mo-apil niining kalihokan. Palihug isulat ang imong ngalan ug ang petsa karon, ug markahi kung mouyon ka o dili mouyon.

Ngalan: _____

Petsa: 8/23/2026

Palihug markahi ang usa:

☑ Mouyon ko nga moapil.

☐ Dili ko mouyon nga moapil.

2. 参加者(a)とFEST作成マニュアルの読み合わせを行い、意見をもらう

マニュアル読み合わせは、住民I、住民Eと行った。2人とも財布分けの方法や利点などについて真剣にマニュアルを読んでくれた。FEST作成マニュアルを読み終わり、現地作成マニュアルを作成するために何か追加するべき情報はないかなどの意見を尋ねた。

住民I

財布分けではないが、出納帳を使っていると言っていたためエレナの家に行き出納帳の写真を撮らせてもらい、その写真を現地作成マニュアルに載せる予定であったが、予定が合わず、出納帳の写真の撮影は行えなかった。

住民M

行っている財布分けはFEST作成マニュアルに記載されている通りであるため、追加する情報はないとのことであった。

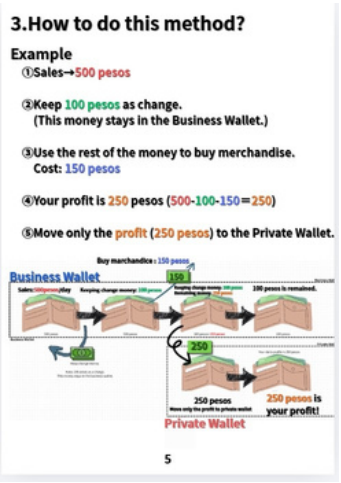
また、読み合わせを行っているときに文字が小さい箇所や、文量が多い箇所があったため、
より読みやすいマニュアルにするために訂正を行った。

3.参加者(a)の意見を基に、現地作成マニュアルを作成する
結果として、追加や修正を行った箇所は次の通りである。
・財布分けの方法の図の文字の拡大
・文章の訂正 (現地作成マニュアルはBlockIII住民に向けたものであるため)

以下の写真は、現地作成マニュアル(英語版)より抜粋したものである。







4.完成させた現地作成マニュアルを参加者(a)に読んでもらう。
各住民の家に赴き、現地作成マニュアルを参加者に読んでもらった。





5.参加者(a)のコーチング練習を行う
住民Iに現地作成マニュアルを読んでもらい、コーチング練習を3回行った。
また下記の伝播評価シートに基づいて、各項目を○か×で判断しコーチング能力の評価を行った。
※以下、Q＆Aはビサヤ語から翻訳した日本語をそのまま掲載している。

6.参加者(a)のコーチング練習を行う。

住民I コーチング練習1回目
①財布分けについての説明の練習

Q.財布分けとは何ですか？	A. 財布分けは、お金を分けて管理します。資本金は資本金、売上は売上、利益は利　益で分けます。利益はさらに分けます。利益を半分にして、生活・消費用、貯金　用、そして毎日のためのお金に分けます。
Q.財布分けを行って変わったことは何ですか？	A.お金を分けて管理をするようになって、貯めておけるお金ができました。それに、ミシンの支払いに使えるお金も準備できています。さらに、緊急事態が起きたときにも使えるお金があります。

Q.財布分けを行ったことで収入を明確に把握することはできましたか？	A.財布分けをすることで、自分の収入がはっきり分かるようになりました。
Q.財布分けのやり方を口頭で説明してください。	A.資本金が4000ペソだとして、1000ペソの利益が出た場合、その1000ペソをさらに分けます。500ペソを生活費・消費用、250ペソを貯金、残りの250ペソを緊急用のお金にします。

住民I コーチング練習2回目
①財布分けについての説明の練習

Q. 財布分けで、ビジネス財布とプライベート財布をなぜ分ける必要があるのですか？	A. お金を分けて管理することの大切さが分かりました。そうすることで、元手(資本金)、利益、経費、貯金が明確に見えるようになりました。

住民I コーチング練習　3回目
①実際に財布分けの実践練習を行った。
FEST側が財布分けの財布とお金に見立てた紙を用意し、住民Iがマニュアル通りに説明を行った。
②ワークショップにて住民に見せるボードを見せながら練習を行った。
FEST側がワークショップにて住民に見せるボードを順番に並べて、一緒に文章を読みながら順番を確認した。

	練習1回目	練習2回目	練習3回目
評価項目	○△×	○△×	○△×
スモールビジネスPJでどのように変われたかを説明できる	◯	◯	◯
財布分けとは何か(概要)を説明できる **• プライベート財布とビジネス財布を分ける** **• お金を管理するために行う**	◯	◯	◯
財布分けのメリットを説明する **・収支が明確に分かるようになる** **・お金を貯蓄できるようになる**	◯	◯	◯

財布分けの方法を説明する • **その日の売上をビジネス財布に入れる** • **次の日に使うおつり額をビジネス財布のミニポケットに入れる** • **仕入れ額をビジネス財布の大ポケットにある残高から支払う** • **大ポケットにある残高をプライベート財布に移す**	△	△	◯
財布分けを実践して得た効果を説明する	◯	◯	◯
なぜビジネス財布とプライベート財布に分ける必要があるか(財布分けの本質)を説明できる **※財布分けの本質とは、ビジネス用の財布とプライベート用の財布を分けることによって、適切な収支管理と利益の明確な把握が可能になり、計画的な貯蓄ができるようになることである。**	◯	◯	◯

コーチング練習を3回行った経緯

1回目

財布分けの方法を説明する「なぜビジネス財布とプライベート財布を分ける必要があるか？」という項目に関して、△と判断した。理由は、ビジネス財布・プライベート財布という言葉をコーチング練習中に一言も話しておらず、財布を使って財布分けについて説明できるか疑問に感じたためである。

2回目

練習内容①から、「なぜビジネス財布とプライベート財布を分ける必要があるか？」に関して◯になったと判断した。「財布分けの方法を説明する」という項目に関しては、2回目の練習までに財布を実際に持って練習を行っていなかったため、3回目の練習で行った。

3回目

練習内容の①を完璧に行えたため、財布分けの方法を説明するに関して◯であると判断した。よって住民Iの伝播評価は全て◯として評価した。

7.BlockIIIの住民にワークショップの宣伝を行う。

ワークショップの宣伝は、住民IとFESTメンバーで行った。

8.BlockIII住民へのワークショップ

実施概要

現地参加者(a)	1名(住民I)
受講者	6名

※受講者のうち、5名が財布分けを実施する対象者となることになった。財布分けを実施する対象者は、全員が個人事業を行っている。

実施内容
FESTメンバーが司会進行を務め、参加者(α)が以下の①〜⑧ついて説明する形で進行した。

①財布分けでの変化	財布分けによって貯蓄が増えたと説明した。
②財布分けとは	お金を分けて管理する方法で、利益を別の財布に移し、貯金・支出・緊急時用に分配すると説明した。
③メリット	貯蓄の明確化ができると説明した。
④効果	貯蓄額と緊急時用の金額が明確化され、貯蓄が増えたことも実感できたと説明した。
⑤やり方	現地作成マニュアルに掲載してある図を全員に見せながら、２つの財布と偽札を使って実演した。
⑥体験	受講者全員が2つの財布と偽札を使い、教えあいながら体験した。参加者(a)も都度サポートした。 ※この際に財布も配布した
⑦今後のビジョン	BlockIII全体に財布分けを広めたいことを伝えた。
⑧質疑応答	質問はなく、全員が理解できたと答えた。

c. ワークショップ後に行ったこと
• 受講者にアンケートを実施した。質問は以下の通りである。このほか、参加者(α)へのメッセージも記入してもらった。

Q1-1	今回は人を集めて説明会を開く形式でした。このワークショップの形式に満足していますか？
Q1-2	ワークショップ以外に良い形式があれば教えてください。
Q2-1	財布分けは理解できましたか？
Q2-2	どのようなことが分からなかったのかを書いてください。
Q3	今回の説明を聞いて実際に財布分けをやってみたいと思いましたか？

• アンケート結果は、全ての質問に「はい（Yes)」の回答があった。
• 受講者の顔を把握するため、一人ひとりと写真撮影を行った。
• 受講者全員の希望で、後日全員で経過観察を行うこととなった。

d. ワークショップに来られなかった住民への対応
宣伝の際にワークショップの受講を希望していたが、予定が合わず来られなかった住民2名に対して、自宅訪問でコーチングを実施した。そのうち1名の住民は既に自身で収支管理を行っていたため、財布分けは実施しなかった。

9.受講者の財布分けの経過観察

a. 経過観察の概要
ワークショップの受講者、およびワークショップではなく個人訪問で財布分けを教え、
財布分けを実際に行う対象者となった住民、計6名（住民1〜6）について、1日おきに2回の
経過観察を行った。しかし先方の予定もあり、2名は2回目の経過観察を行えていない。

b. 経過観察の結果
経過観察を行った対象者ごとの、財布分けの理解と日常での実施度

対象者	1回目	2回目	財布分けの理解、実施度
住民1	実施	実施	財布分けについて理解しており、実際に財布を使って日常で実践していた。
住民2	実施	実施できず	1回目の時点ですでに財布分けを理解しており、実際に財布を使って日常で実践していた。

住民3	実施	実施	財布分けについては理解していたが、日常では実施していなかった（ビジネスが軌道に乗っておらず、財布分けを実施できるほどの資金が現在ないため）。
住民4	実施	実施できず	財布分けを理解できておらず、2回目も会えず経過観察ができていない。
住民5	実施	実施	財布分けについて理解しており、実際に財布を使って日常で実践していた。
住民6	実施	実施	財布分けについて理解しており、2回目の経過観察から実際に財布を使って日常で実践していた。

c. 今後の予定
- FESTは経過観察の際、対象者に対して財布分けで不明点があれば参加者(α)に聞くよう伝えた。
- 参加者(α)には、①FESTがいない期間中、対象者から質問があれば答えたりアドバイスをしたりすること、②対象者が質問に来たら、そのことをFESTに連絡することの2点を伝えた。
- 2027年春渡航では、問題解決能力を身につけている対象者がいるかを測定する。今渡航で記録した「2026年夏渡航時点での貯蓄」と比較し、財布分けによって貯蓄額が増加したかを調査する。

4-3．スモビジPJ参加者の個別対応

春渡航で実施した目標達成度評価にて満点になっていない人に対して個別に対応を行った。
結果は以下の通りである。

住民T
16期春渡航時に開始したチキン屋のビジネスは、BlockIII前の改修工事によって、お店があった場所を使用することが難しくなり、16期夏渡航時は実施ができていなかった。金銭的に他に場所を借りることは難しく、今後もお店の再開は見込めない状況であった。そのため、住民TはSMに就職をすることを決めており、スモビジPJとしての支援は終了することを伝えた。

住民J
今回の渡航では直接お会いすることができず、個別に対応することができなかった。

住民S
今回の渡航では直接お会いすることができず、個別に対応することができなかった。

4-4．ニーズ調査

概要

私たちはこれまで、ニーズ調査を複数回実施してきた。その中で特に住民が声を上げていたのが、浸水（洪水）問題とゴミ問題の2点だ。2025年夏渡航で実施したニーズ調査においても上記2点が上位に挙げられた。そこで、地域全体に還元できるプロジェクトとして、ゴミ問題と浸水問題を取り上げることとした。しかし、BlockIIIにおけるゴミ問題や浸水問題の具体的な情報は少なかったため、16期夏渡航で追加のニーズ調査を行った。

ニーズ調査の対象者

対象者は大きく分けて3種類ある。
①BlockIIIの住民(13名) ②バランガイスタッフ(1名)
③BlockIII以外のセブ市の市民(2名)

上記3つの対象者に分けた意図としては、異なる立場でゴミ問題と浸水問題に対してどのような認識を持っているのかを知るためだ。バランガイスタッフに対するニーズ調査は、主に行政機関がどのような対応をしているのかについて情報収集を行った。BlockIII以外のセブ市民に対するニーズ調査は、主にBlockIII以外の地域でゴミ問題と浸水問題に対してどのような対策がされているか、またどのような状況にあるのかについて情報収集を行った。そのため、対象者によって異なる質問を考えた。

ニーズ調査の内容

ゴミ問題と浸水問題に分けて、質問の内容と回答を提示する。また、質問内容が対象者によって異なるため、
対象者ごとに質問内容を提示する。

①BlockIIIの住民
全11問、ゴミ問題に関する質問を6問、浸水問題に関する質問を5問作成した。

②バランガイスタッフ
全12問、ゴミ問題と浸水問題に関する質問をそれぞれ6問ずつ作成した。

③BlockIII以外のセブ市民
全6問、ゴミ問題に関する質問を4問、浸水問題に関する質問を2問作成した。

ニーズ調査結果

結果はゴミ問題と浸水問題に分け、その中で対象者ごとに分けて提示する。

問題	聞いた質問
ゴミ問題	**【BlockIII住民】** ・ゴミ問題を解決するために、Blockⅲでできることは何だと思いますか？ ・Blockⅲの住民がゴミを捨てることについて、個人的に問題だと思いますか。はいの場合はゴミによってどのような問題が起こりますか？ ・ゴミ箱を設置したら、ゴミをゴミ箱に捨てますか？ ・ゴミ箱を設置するのに便利な場所はどこですか？ ・学校でゴミ問題について教えられていますか？ ・ゴミ問題に対処するための活動を行うとしたら、参加したいですか？ **【バランガイスタッフ】** ・ゴミ問題に対処するために、すでに行っている活動はありますか？ ・この地域にゴミ収集車は来ますか？来る場合、どのくらいの頻度で来ますか？ ・ゴミ問題について、バランガイとして一番困っていること・足りないと感じているものは何ですか？ ・セブ島のゴミ回収システムはどのようなシステムで行っていますか？ ・ポイ捨てに対する政府、市による対策はありますか？実際に機能していますか？ ・住民向けの啓発活動（清掃活動、教育プログラムなど）は行われていますか？ **【BlockIII以外のセブ市民】** ・あなたが住んでいる地域ではゴミはどのように住民によって収集されていますか？ ・自分が住んでいる地域にゴミ収集車は来ますか？来る場合、どれくらいの頻度で来ますか？ ・学校でゴミ問題について教えられていますか？ ・自分たちの地域にゴミ箱はありますか？ゴミ箱は機能していますか？
浸水問題	**【BlockIII住民】** ・雨季にはどの程度浸水が発生しますか？（頻度・水深・被害の範囲） ・浸水時に、避難をする場所はありますか？ ・浸水時に、どのような対応をしますか？（上手く行ったこと・いかなかったこと） ・土のうや排水ポンプなど、浸水対応に使える資材は地域にありますか？ ・浸水の問題に対処するための活動を行ったら、参加したいですか？ **【バランガイスタッフ】** ・浸水時に、どのような対応をしますか？（上手く行ったこと・いかなかったこと） ・土のうや排水ポンプなど、浸水対応に使える資材は地域にありますか？ ・バランガイとして浸水対策は行っていますか？ ・排水溝を修理するなどの施策を、バランガイとして行っていますか？ ・浸水が起きた際、住民への警報や避難の仕組みはありますか？ ・市（シティ）や他の行政機関として連携して行っている対策はありますか？ **【BlockIII以外のセブ市民】** ・浸水時に、どのような対応をしますか？（上手く行ったこと・いかなかったこと） ・土のうや排水ポンプなど、浸水対応に使える資材は地域にありますか？

問題	回答
ゴミ問題	**【BlockIII住民】** ・BlockIIIでできることとして、プラスチックゴミを分別することや、住民同士で協力して、地域をきれいに保つことが挙げられた。また、バランガイに協力を仰ぐことや、道路のゴミを管理すること、各自が適切にゴミを捨てることなどの意見もあった。 ・BlockIIIの住民がゴミを捨てることを問題だと思う人が、13人中12人だった。また、ゴミが多すぎて収集車が満タンになり回収できなくなることや、排水溝にゴミが捨てられること、バランガイがゴミを回収しなければならなくなることなどが挙げられた。 ・ゴミ箱が設置された場合は、利用すると多くの人が答えた。一方で、ゴミ箱が設置されても、一部の人は利用しないのではないかという意見もあった。 ・ゴミ箱の設置場所として、BlockIIIの入口付近の道路、チャペル前のサリサリストア、チャペルの横、個人の家などが挙げられた。 ・学校でゴミ問題について教えられているかについては、13人中11人がYesと回答した。 ・ゴミ問題に対処するための活動を行った場合に参加したいかについては、未回答の1人を除き、全員がYesと回答した。 **【バランガイスタッフ】** ・現在行っている活動として、BlockIIIを含む各ブロックでゴミ収集車による定期的なゴミ回収を実施している。また、排水溝や水路の清掃も定期的に行っている。 ・この地域にゴミ収集車が来る頻度については、毎日来ているとの回答があった。 ・バランガイとしてゴミ問題で最も困っていることは、ゴミの処分場所が不足していることである。また、住民のマナーや意識も課題となっており、家庭ゴミを排水溝などに捨てる人がいるため、バランガイによる家庭ゴミの回収だけでは対応できない状況である。 ・セブ島のゴミ回収システムについては、各バランガイのゴミ収集車が地域のゴミを回収し、市のゴミ収集車に移し替え、その後、ゴミ山まで運搬している。 ・ポイ捨て対策として、各バランガイに環境担当職員（BEO）が配置されている。BEOは基本的に1日を通して、違反者に違反切符を発行する役割を担っている。 ・住民向けの啓発活動として、政府は毎週「Kalinisan（清掃）」というプログラムを実施している。また、バランガイでも毎週清掃活動を行っており、清掃する場所はその都度ランダムに選ばれている。 **【BlockIII以外のセブ市民】** ・ゴミの収集方法については、バランガイごとにゴミ収集のスケジュールが決められていると回答した。 ・ゴミ収集車が来る頻度は、週2回または週4回とバランガイによって異なると回答した。 ・学校でゴミ問題について教えたかについては、Yesと回答した人とNoと回答した人の両方がいた。Yesと回答した人は、ゴミによって引き起こされる問題について考えることや、責任ある市民になることについて学校で教えられていると回答した。 ・自分たちの地域にゴミ箱があるか、また機能しているかについては、市内でもゴミ収集が行われているのは一部の地域だけであり、住民の中には依然として責任ある行動を取らない人もいるため、ゴミ箱が効果的に機能していないとの回答した。

問題	回答
浸水問題	**【BlockIII住民】** ・雨季の浸水の程度については、7人が膝、または膝下まで浸水すると回答した。浸水の頻度については、地域内でも回答に差があった。 ・浸水時の避難場所については、6人がバランガイホール、3人がバランガイホール前の体育館、3人が学校と回答した。そのほか、家にとどまる、バスケットコート、隣人の家、チャペルなども避難場所として挙げられた。 ・浸水が発生した際の対応については、4人が浸水によってゴミが溜まるため掃除をすると回答した。そのほか、家にとどまる、避難するという回答もあった。 ・浸水に対応するための資材が地域にあるかについては、意見が分かれた。Yesと回答した。住民はシャベルや排水ポンプがあると答えた。 ・浸水問題に対処するための活動を行った場合に参加したいかについては、ほとんどの人がYesと回答した。 **【バランガイスタッフ】** 浸水が発生した際の対応について、支援地域は海岸沿いに位置し、ほかのバランガイから流れてきた水が海へ流れ出る前の最後の陸地にあたるため、3つの段階（準備・避難→洪水時の安全確保→洪水が収まった直後）に分けて対策がなされている。 **【BlockIII以外のセブ市民】** ・浸水が発生した際の対応については、政府の取り組みは機能していないと回答した。 ・浸水に対応するための資材が地域にあるかについては、資材がないと回答した。

消防署見学

見学するに至った経緯

バランガイにて追加ニーズ調査を行った際、消防関係のサポートをしている方から消防署に洪水対策の器具が置いてあるから見学しに行かないかとお誘いを受け実現した。

見学内容

場所：バランガイサワンカレロの隣にある消防署



（消防署においてあった洪水対策関連の器具）
①洪水用のボート
→腰ぐらいの洪水が起きた時に使用。ライフジャケットもある。同時に使用。



②救助用スプレッダー
→崩落が起きた際に人を助けるために狭い部分を広げたり、落ちてきたものを持ち上げる役割がある。ドアをつぶし、開ける役割もある。



③救助用カッター
→先端がハサミになっていて、固い金属を切断することもできる。



④救助用マット型空気ジャッキ
→空気の力でマットを膨らませ、重たいものを持ち上げる。1トンのものも持ち上げることができ、瓦礫や崩落した家の間で住民救助に使われたりする。

⑤救助用の支えるための棒
→救助のために崩落してきたものを持ち上げ人命救助するための道具。他のものと異なり、長い棒であるため、広めの空間を確保できる。この器具の支えのもと、作業ができる。



活動の概要

・最近ではいくつかの火災に対応。出動の際には、PPE（防護服・個人防護具）を着用する。ごみ山が崩れたときも、人命救助のために出動。上記の器具（クッション）を使用。

・洪水の際には、上記のボートやライフジャケットを使用することがある。必要があれば、ロープを使って避難させることもある。洪水での消防車の使用は、人を助けたり、必要な物資を移動させるために使用することが多い。

・洪水などの対策グッズは十分ではないが、頻繁に洪水が起きることもあり、チーフの指導の下、洪水には適切に対応できている。そのため、現在直面している大きな問題はない。

・救急車は基本的に無料。(Free to be paid) 民間病院、民間救急車だと有料の可能性あり。

考察

洪水対策の器具見学に出向いたが、洪水への対策グッズは少ない印象であった。話を聞いたところ、頻繁に起こることもあり、洪水の規模が大きいときに消防車を使い、物資を運搬・人命救助をしていることが分かった。彼らにとって、洪水が大きな問題と捉えている様子はなく、ボートやライフジャケットの使用も時々であるという。消防署・消防車の役割としては、洪水がメインではなく火災や人が下敷きになっているなど、規模が大きな問題であり、その際に上記の器具を使っているため、年に2回の使用と消防車の出動も少ない印象であった。また、消防署の人々は暖かく、筋トレなど生活の一部として消防活動をしている様子だった。実際に使用しながら説明を受けたため、使い方など理解を深められた。

4-5．フィーディング

経緯
2025年度の夏渡航の際に強い要望があり、バランガイやその周辺の人々、住民Iとの関係構築のために実施を考えた。春渡航では親子丼、夏渡航ではお好み焼きを作った。

良かった点
安全に怪我なく調理を行うことができた。材料に関しては住民Iに何度も確認をとったことで予定していた通りの準備ができた。また、フィーディングの場にいた人に分配でき、かつ余りが無い分量を用意することができた。夏渡航では、子供向けのお絵描きを平行して行った事で飽きさせずに危険な行動につながらないように工夫することができた。

改善点
ジュースを飲むときに1人1人(子供中心)にプラスチックコップを配ったが、飲み終わったごみが道路に散乱してしまった。最終的にはすべて回収したゴミが残っている状況ではなかったので、ゴミを回収する担当や十分なゴミ袋を用意すれば良かった。



4-6．ラジオ体操

概要
運動を通し、住民との関係を築くことを目的として行った。単発の活動として終わらせるのではなく、住民の定着度を高めることで、FESTがいない期間にも継続して実施してもらえることが期待できるため、継続性のある活動だと考えた。また、健康維持のための運動でもあるため、関係構築と健康の2つの側面で利点があると考えた。
ラジオ体操の音源はビサヤ語でオリジナルのものを作成することで、住民に親近感を持ってもらい、参加へのハードルを下げることを目指した。

<u>良かった点</u>
・BlockIII前の道路で行ったため活動場所が狭かったが、自動車が通る際には周囲の状況をよく確認しながら声掛けを行い、安全に終了することができた。

<u>改善点</u>
・スマートフォンの音声のみでラジオ体操の音源を流したため音量が小さく、参加者に聞こえにくい場面があった。
・準備が間に合わず、ラジオ体操マスターカードのすべてにQRコードを載せることができなかった。



4-7．夏渡航の目的・目標に対する評価

目的①の評価
スモールビジネスPJで得られた学びを参加者（α）からBlockIII全体へ伝播するという点では、財布分けの施策を通じて、参加者が身につけた知識や経験を他の住民へ伝える段階まで進めることができた。これにより、PJ参加者だけでなく、他の住民もビジネスに取り組むきっかけをつくることができたと考える。一方で、住民が主体となってビジネスを継続・発展させていく仕組みの構築については、今後も住民同士で知識や経験を共有し、互いに支え合える体制を整えていく必要がある。

目的②の評価
住民のニーズに対して新たなPJでアプローチする基盤を固めるという点では、住民やバランガイスタッフへの調査を通じて行えた。調査で得られた情報をもとに、今後のPJの方向性を検討していく。

目標①の評価
参加者（α）がコーチング能力を身につけ、実際にBlockIIIの住民に対してコーチングを行うという目標については、参加者が他の住民へ学びを伝える段階まで進めた点で、成果があったと考える。

目標②の評価
BlockIIIの住民やバランガイスタッフに対して、他のニーズの有無やその詳細を調査するという目標について、調査によって把握できたニーズを整理することができた。

5．最後に

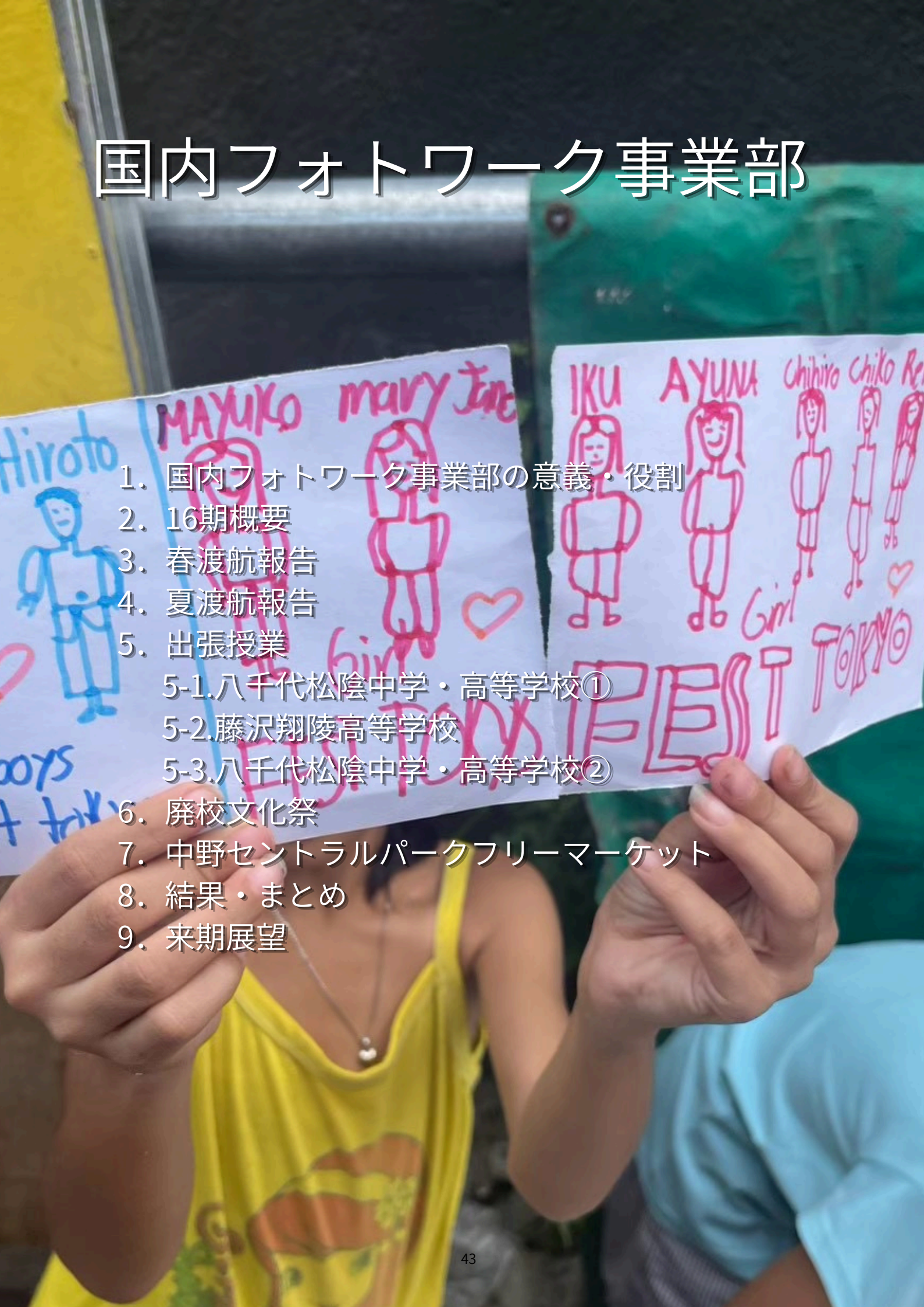
5-1．16期海外事業部まとめ

16期では、スモビジPJにおいて大きな成果を上げることができたと考える。特に、財布分け施策を成功させ、実際に住民の生活に取り入れてもらうだけでなく、その取り組みを他の住民へ伝播するフェーズまで進められたことは、大きな成果である。また、これまでスモビジPJを通じてビジネスを開始することができていなかった住民に対しても、ビジネスの開始までつなげられたことは、今期の重要な成果の一つであると感じている。
さらに、今期実施したニーズ調査によって、住民が抱える課題や求めている支援について理解を深めることができた。この調査結果は、来期に新たなPJを立ち上げる際、その必要性や実現可能性を検証するうえで重要な材料になると考える。
今期に実施した施策や得られた成果を今期限りのものにするのではなく、住民の間に継続的に広げ、定着させていくことも重要である。そのため、財布分け施策をはじめとする取り組みの内容や、過程を丁寧に整理し、住民が主体的に伝播していく必要がある。16期で生まれた成果を一時的な成功にとどめず、住民自身が実践を継続し、さらに周囲へと広げていける状態を目指すとともに、今期の経験や調査結果を来期に行う新たなPJへ確実につなげていきたい。

5-1．来期展望

16期まではスモールビジネスプロジェクトを実施し、地域住民のビジネス支援に励んできた。17期では、ゴミ問題の課題解決を目指しプロジェクト設立を行う。ゴミ問題は、より住民の生活に身近なものであり、依存関係を生まずにFESTと地域住民の双方に利点がある支援を行うことは簡単ではない。しかし、ゴミ問題の解決に取り組むことで、浸水などの他のニーズにもアプローチすることができると考えられる。そのために、現地住民と丁寧にコミュニケーションを取って関係構築を大切にし、FEST主体ではなく、住民主体の支援を実施することができるように努めていきたい。

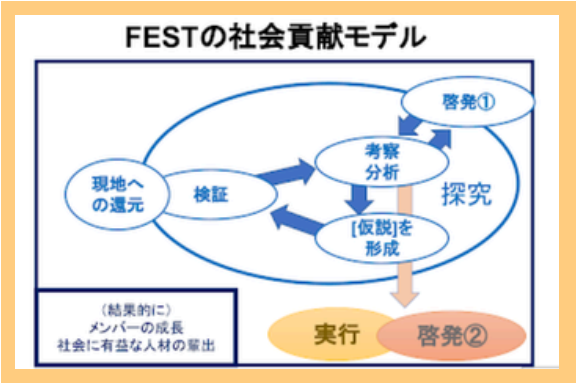
国内フォトワーク事業部



1. 国内フォトワーク事業部の意義・役割
2. 16期概要
3. 春渡航報告
4. 夏渡航報告
5. 出張授業
   - 5-1.八千代松陰中学・高等学校①
   - 5-2.藤沢翔陵高等学校
   - 5-3.八千代松陰中学・高等学校②
6. 廃校文化祭
7. 中野セントラルパークフリーマーケット
8. 結果・まとめ
9. 来期展望

1．国内フォトワーク事業部の意義・役割

本団体は、FESTの社会貢献モデルを基に啓発活動を通じて理念を広げ、最良の国際協力を探究、実行、啓発していく必要性がある。またその中で、「世界から向こう見ずな支援を無くす」ことが目指されている。そのため私たちは、海外事業部を中心とした現地での支援を行うことだけではなく、その活動を通して私たちが発見した最良の国際協力とは何かに対する答えを発信していかなければならない。その役割を担うのが、国内フォトワーク事業部である。



参考：15期活動報告書 (FESTの社会貢献モデル)

2．16期概要

2-1.はじめに

16期国内フォトワーク事業部は、15期終了後、人数の関係で海外事業部と部を分けずに活動をする形で始動した。16期では、国際協力に関する具体的な知識のない人が、国際協力に興味を持つためのきっかけを得ることに焦点を当てて活動した。少ない人数ではあったが、2つのイベントと3回の出張授業を行うことができた。さまざまなかたちで啓発への挑戦を重ねた16期国内フォトワーク事業部の活動を、ぜひ御覧いただきたい。

2-2.目的・目標

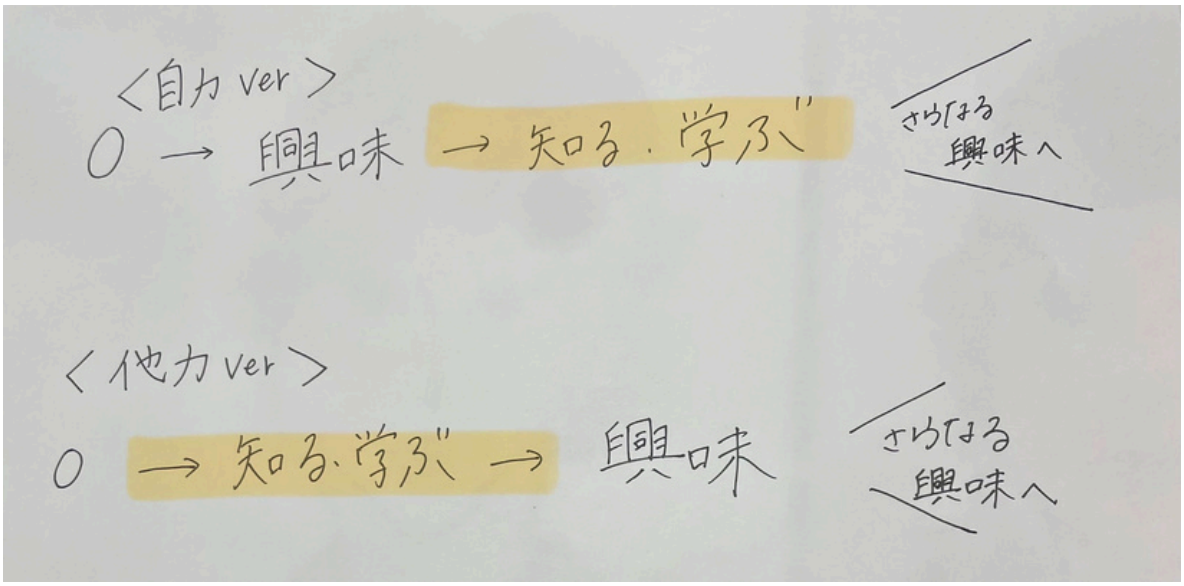
目的は、主目的と副目的の2つを定めた。主目的は、対象者がFESTの啓発によってどのような状態になってほしいか、副目的では、私たち16期国内フォトワーク事業部が最終的にどのような状態になりたいかを示している。

主目的	国際協力に知識のない人たちが、新しい知見を得て興味へと繋げる
副目的	（FESTが）国際協力に知識のない人たちは、何に興味・関心を持つか発見する
目標	【主目的に対する目標】 FESTで最良の国際協力を探求実行している私たちだからこそ見ることができた「フィリピンの姿」や「感じた思い」をありのまま発信し、その理解や関心を促す 【副目的に対する目標】 複数の手法を用いて多角的な知識提供を行い国際協力の知識がない人たちが何に興味・関心を持つのか探る 開催数 PJ実施：4

対象者は、年齢層にこだわらず国際協力に知識のない人とした。国際協力に知識がない人の定義は、辞書的・教科書的な意味の理解はできているが具体例やその詳細を説明できる状態にいない人とする。

2-3.FEST介入ポイント可視化図

16期では国際協力に知識がない人が新しい知見を得て、興味へと繋げるためのきっかけを与えられる活動に焦点を当てたいと考え、アップリフトモデルではなく、FEST介入ポイント可視化図というものを作成した。



上記の図は、国際協力に知識がない人たちがどのようにして興味へと繋げていくのかの過程を図式化したものである。加えて、16期の国内フォトワーク事業部がどのような対象者に啓発活動を行っていくのか示した図である。

16期では、辞書的・教科書的な意味の理解はできているが、具体例やその詳細を説明できる状態にいない人たちを対象に啓発活動を行うものとする。図の中では、辞書的な意味を理解している状態は0の位置にあたる。

興味を持つ過程には大きく二つのパターンが存在すると考えた。1つは、何かをきっかけに知識より先に興味を持ち、知識を学んでいくパターンであり、2つ目は、学び、知識をつけてから興味を持つパターンである。黄色で塗られている矢印の部分をFESTが介入するポイントとする。

私たちが対象者に求めている状態としてイメージしているのは、ただ国際協力を辞書的な意味を理解しているということではなく、頭の中で動画として想像できる状態を指す。

効果測定は主にアンケートで行うこととする。
アンケートには〈0→1の細分化〉を利用し、どの状態まで到達することができたかを答えてもらう。

〈0→1の細分化〉
①見たことがある、聞いたことがある
②辞書的、教科書的な意味の理解
③それに関わる具体例がわかる（FEST）
④具体例の詳細がわかる
⑤画像としてのイメージができる
⑥当事者の視点を想像できる
⑦統合的な理解ができる（知識が頭の中で立ち上がる状態）

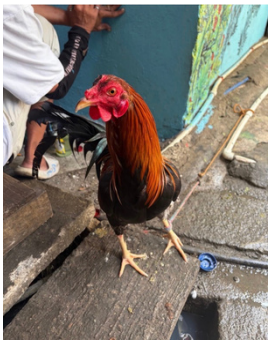
④〜⑤は写真としてのイメージ、⑦では動画としてのイメージをすることが可能な状態となる。

3.春渡航報告

3-1.春渡航概要

春渡航では、日本国内での出張授業で実施するフォトランゲージの際に使用する素材を集めを実施した。フォトランゲージでは、写真を用いた活動を通して、生徒たちが日本との違いを考えたり、自分のイメージとの比較から新しい気づきを得ることを目的とした。

写真を通して、自分が抱いていたイメージとのギャップを感じてもらい、日本との違いや文化の多様性に気づき、また、私たちが実際に現地で感じた人とのつながりについても感じてもらいたいと考えた。
そこで、以下の4種類の写真を撮影してくることに決定した。



・馬の写真
・ニワトリの写真
・フィッシュマーケットの写真
・住民との集合写真

詳細については、3-3.写真撮影に記載する。

3-2.目的・目標

目的	日本で出張授業を行うための素材集め
目標	必要な4種類の写真を全て撮って帰る



3-3.写真撮影

内容
出張授業内でのフォトランゲージで使用する素材として、以下の4つを挙げた。
・日本では見られない、馬が道路を走っている写真
・支援地域内でニワトリが飼育されている写真
・海外事業部のPJであるスモビジPJの参加者がフィッシュマーケットで服を売っている写真
・支援地の住民と撮影した笑顔の集合写真
それぞれの項目で、アップで対象だけを写した写真と、その周辺の様子もわかるような写真の2枚を撮影し、イメージとのギャップを感じてもらえるようにした。

結果
アップの写真とその周辺の様子もわかる写真の2枚を撮影してくる予定であったが、渡航中に写真撮影と確認をしていく中で、動画の方がより具体的な現地の様子や雰囲気を伝えることができるのではないかと考え、アップで対象だけを写した写真と、周辺の様子も分かる動画を撮影することに変更した。
4つの写真の詳細を事前に決め、渡航中に確認・共有を行ったことにより、予定していた写真よりもさらに授業内容に適している動画も撮影することができた。





4．夏渡航報告

4-1.夏渡航概要

夏渡航では、渡航後の10月のフリーマーケットで販売する商品の素材集めを実施した。フリーマーケットでステッカーやポストカードの販売、募金、ミサンガの販売をするために、夏渡航では子どもたちとミサンガ作り、お絵描きを行った。

4-2.目的・目標

目的	・国内で行う啓発活動に必要な素材集めを行う ・海外事業部のPJを円滑に進められるようサポートする
目標	・ミサンガを20個以上作る（ミサンガ作り） ・さまざまなレパートリーの絵を集める（お絵描き） ・参加してくれる子ども全員に材料などが行き届くようにする （ミサンガ作り、お絵描き）

4-3．ミサンガ作り

内容

フリーマーケットで販売するミサンガを、子どもたちと一緒に作成した。
14期に実施したビーズアクセサリー作りの反省として、「子どもたちがアクセサリーを欲しそうにしていたため、今後同様のイベントを開いてプレゼントするとよい」という内容が挙げられていたため、ミサンガ作りに参加してくれる全員に行き渡るように、事前にプレゼントする用のミサンガを40本ほど用意した。
フリーマーケットで販売する素材として確実に持ち帰ることができるよう、15期夏に実施したプロフィール帳交換PJと同様に、子どもたちに作ってもらったものと事前に用意したものを交換する形を取った。

結果

渡航前はミサンガ作りのみを実施する予定であったが、ミサンガ作りが細かい作業であり難しいと感じる子がいる可能性があることや、小さい子どもだと参加が難しいことから、渡航中に予定を変更し、ミサンガ作りのみでなく同時にビーズアクセサリー作りも実施することとした。
結果、多くの子どもがミサンガ作りに取り組んでくれ、ミサンガ作りが終了したあとにビーズアクセサリー作りを行う形となった。ミサンガは事前に用意したものと交換し、18本回収することができたが、急遽現地で行うことにしたビーズアクセサリーは、6個しか回収することができなかった。
しかし、ビーズを持つメンバーを何人かに分けることや、学校があり後から参加する子どもやミサンガ作りを最後まで頑張ってくれた子どもの分も残しておいたことによって、「参加してくれる子どもに材料が行き届くようにする」という目標を達成することができた。



4-4.お絵描き

内容
フリーマーケットで販売するステッカーやポストカードの素材となる絵を描いてもらった。
現在手元にある素材だけでなく、さらにレパートリーを増やし、より多くの人の目に止まるような商品を制作することを目的とした。
また、海外事業部で関係構築のために行ったフィーディングの際に火を使うため、子どもたちが近づいてしまい危険な状況にならないよう、お絵描きを同時に実施することで、安全に調理を行うことができるようにする目的もあった。

結果
多くの子どもたちが参加してくれ、さまざまなレパートリーの絵を集めることができた。しかし、お絵描きを始める前に、自分の名前などの個人情報は書かないよう説明したが、名前を書いてしまう子どもが多かった。また、小さい紙を100枚ほど用意したが、雑に扱われてしまい商品の素材にできなかったものもあったため、紙は1人1枚と制限をしたり、描いてもらう絵の内容をある程度定めたり工夫をするべきであった。



5.出張授業

5-1.八千代松陰中学・高等学校

概要
日程：2026年5月23日（土）
時間：9:00〜10:20
学校名：八千代松陰中学・高等学校
対象：中学１年生〜高校3年生
形式：グループワークメインの参加型授業
参加者：生徒11人

内容

5分	導入(自己紹介、授業の流れの説明)
10分	団体説明、紹介動画の視聴
5分	支援地紹介
30分	ビンゴ大会
	休憩
8分	クイズ
30分	フォトランゲージ
7分	国際協力やFESTの活動について
計100分	

ビンゴ大会
FESTが用意したいくつかのフィリピン、セブやFESTに関係する用語の中から
9つ選んでビンゴの用紙を作成してもらい、ビンゴを行った。FESTは紹介したい用語を実際にビンゴでの当たりとし、紹介を交えて進めた。ビンゴになった生徒には、FESTのポストカードをプレゼントした。



フォトランゲージ
はじめに一部を切り取った写真や動画を見てもらい、考えたことをグループで
共有し、その後さらに広く様子を写した写真や動画を見て答え合わせをした。
最初に想像したことや考えたことと事実とのギャップから、フィリピンと日本の違いや、フィリピンにある様々な問題に対して学びや気づきを得てもらった。



結果
ビンゴやグループワークのフォトランゲージなど、参加型のアクティビティを
多く取り入れることで、楽しみながら授業を受けてもらうことができた。
中学1年生から高校3年生という幅広い年齢層であったが、積極的に意見を出して授業に取り組んでもらうことができた。また、授業後には担当の先生から、
またぜひ出張授業をお願いしたいとのお言葉をいただくこともできた。
しかし、他学年かつ初対面の人とのグループワークでは、少し緊張してしまっている様子が見られたため、もう少し配慮すべきだったことが反省点であった。

授業アンケート結果

Q1.国際協力について今の自分に近いものを選んでください

- 「国際協力」という言葉を聞いたことがある
- 国際協力がどんなものか説明できる
- 国際協力を行う団体や活動例を知っている
- その活動内容を具体的に説明できる
- 実際の活動の様子をイメージできる
- 支援する人の立場や思いを想像できる
- 国際協力について深く理解し、自分の考えを持っている

授業前と授業後で同様の質問を行い、授業を通してどの段階に変わったのかを調べた。

授業前→授業後	人数
1→3	1
1→5	2
1→6	4
2→5	1
3→6	1
5→3	1
6→7	1
合計	11

Q2.授業を通して何か新しい視点を得ることができましたか

はい	11人
いいえ	0人
合計	11人

Q3.授業を通して何か興味を持ちましたか

はい	**11人**
いいえ	**0人**
合計	**11人**

「はい」と答えた人は、一番興味深かったことや印象に残ったことは何ですか（一部抜粋）
・“向こう見ずな支援をなくす“というのが興味深かった
・フィリピンの人たちと関係を築きながら支援すること
・貧しい住民がいつも笑顔で明るいこと
・開業を手伝うことが初めて聞く支援の形で興味深かった
・ニワトリが当たり前にいること
・どんな環境でも明るいフィリピン人が印象的だった

Q4.もっと知りたいと思ったことはありますか

はい	**7人**
いいえ	**4人**
合計	**11人**

Q5.授業の感想を自由に書いてください（一部抜粋）

・もともと社会に関わるような話には興味が持てなかったけれど、この機会に専門の方から詳しいお話を聞いて、すごく興味深いなと思いました。将来ボランティアとしてFESTをやるのもいいなと思いました。

・1つの工夫で人々の暮らしが良くなったり、幸せになったり、少しのアイデアがすごく大切なことが学べました。フィリピンの人々の暮らしが実際に写真で見れて日本との違いを詳しく学べました。

・元々国際協力について興味があって、大学生の皆さんがこのように活動を行っていると知ってすごいなと感じました。視野が広がりました。

5-2.藤沢翔陵高等学校

概要
日程：2026年10月3日（土）
時間：11:30〜13:00
学校名：藤沢翔陵高等学校
対象：高校1・2年生
形式：グループワークメインの参加型授業
参加者：生徒35名、保護者2名

内容

5分	導入(自己紹介、授業の流れの説明)
10分	団体説明、紹介動画の視聴
5分	支援地紹介
20分	ビンゴ大会
10分	休憩
5分	国際協力やFESTの活動について
30分	フォトランゲージ
5分	アンケート（フォーム）
10分	座談会
計100分	

授業内容は、5-1.八千代松陰中学・高等学校①と同様のビンゴ大会、フォトランゲージを行った。加えて、授業終了後にFESTの活動に限らず大学生活についてなど自由に話せる座談会の時間を設けた。

結果
ビンゴがとても盛り上がり、フォトランゲージでも、想像力を働かせながらたくさんの視点から意見を出してもらうことができた。また、担当の先生からのご要望があり、授業後にFESTの国際協力以外にも大学生活についてなど気軽に話せる座談会の時間を設け、交流を深めた。後日、興味を持った生徒が毎週水曜日のFESTの活動の見学にも足を運んでくれた。

授業アンケート結果

1．国際協力について今の自分に近いものを選んでください

1.「国際協力」という言葉を聞いたことがある
2．国際協力がどんなものか説明できる
3．国際協力を行う団体や活動例を知っている
4．その活動内容を具体的に説明できる
5．実際の活動の様子をイメージできる
6．支援する人の立場や思いを想像できる
7．国際協力について深く理解し、自分の考えを持っている

授業前と授業後で同様の質問を行い、授業を通してどの段階に変わったのかを調べた

授業前→授業後	人数
1→1	5
1→2	1
1→3	10
1→4	2
1→5	5
4→5	1
5→3	1
5→5	2
5→6	2
6→3	3
6→5	1
6→6	1
合計	34

2．授業を通して何か新しい視点を得ることができましたか

はい	32人
いいえ	1人
合計	33人

3．授業を通して何か興味を持ちましたか

はい	31人
いいえ	2人
合計	33人

「はい」と答えた人は、一番興味深かったことや印象に残ったことは何ですか（一部抜粋）
・ニワトリが街中で生活していること
・向こう見ずな支援をなくすという言葉が印象に残った
・支援する側が良かれと思ってやった支援が、実は支援を受ける人の迷惑になるとは考えたことがなく、どちらもメリットが無く悲しいと感じました。
・スラムとかは治安が悪いイメージがあったがセブ島みたいにすごくあたたかい住民もいることが印象に残った
・タホとハロハロ食べてみたい。
・物価が低いこと、日本と比べて物価の差が違く印象に残った
・現状の支援のあり方の課題と理想的な支援のあり方
・物価
・路上で鶏を解体しているのに驚いた
・ずっと支援するんじゃなくて自立させるってのが凄いなって思った
・鶏が放し飼いされてるところ

4．もっと知りたいと思ったことはありますか

はい	22人
いいえ	11人
合計	33人

5.授業の感想を自由に書いてください（一部抜粋）
・海外での協力活動などがあることは知っていたが実際に参加した人の話を聞いたことはなかったのでとても良い経験になった。
・海外への支援の仕方が、現地に合うように動いていて、ニーズ調査や関係構築の大切さを実感した。
・とても面白い出張授業でした。普段あまり考えないことを、今日の授業で考えることができたので良かったです。

5-3.八千代松陰中学・高等学校②

概要

日程：2026年10月17日（土）
時間：9:00〜10:20
学校名：八千代松陰中学・高等学校
対象：中学１年生〜高校3年生
形式：グループワークメインの参加型授業
参加者：生徒7名、保護者1名

内容

5分	導入(自己紹介、授業の流れの説明)
10分	団体説明、紹介動画の視聴
5分	支援地紹介
20分	クイズ大会
10分	休憩
10分	国際協力やFESTの活動について
30分	課題解決ワークショップ
5分	アンケート(紙媒体)
5分	質疑応答
計100分	

クイズ大会
授業参加者の学年がバラバラで、初対面の人とグループワークを行うことになるため、アイスブレイクとしてグループごとでクイズを行った。グループごとで回答し、正解数が最も多かったグループにはFESTのポストカードをプレゼントした。ビンゴになった生徒には、FESTのポストカードをプレゼントした。

課題解決ワークショップ
支援地域で問題となっているゴミ問題に対して、グループワークを実施し、プロジェクトを立案してもらった。
初めに、フィリピン・セブ島全体のゴミ問題について、そして支援地域内のゴミ問題の現状について説明し、FESTの説明を聞いて考えたことなどをグループで共有し、どのようなプロジェクトを立てることができそうか、概要を考えてもらった。その後、FESTがプロジェクトについて考える際にどのような点に着目しながら詳細を詰めているのかを紹介し、ここで、「撤退した後も住民たちが自立して生活できる」「問題の根本的な解決に繋がる」というような私たちが大切にしていることを感じてもらった。
その後、実際に私たちが普段プロジェクトを考案する際に必ず考えている項目も含めたワークシートを用いて、班ごとにプロジェクトについて再度話し合ってもらった。

結果
前回5/23に実施した際と同様に、中学1年生から高校3年生までと幅広い学年からの参加であったため、反省を活かし、グループワークに取り組みやすいようアイスブレイクとしてグループ対抗でクイズを実施した。それにより、グループ内でも意見を出し合いながら授業に参加してもらうことができた。また、藤沢翔陵高等学校で実施した座談会を取り入れ、話しやすい雰囲気をつくり、たくさん質問をしてもらうこともできた。

授業アンケート結果

Q1.授業を通して何か新しい視点を得ることができましたか

はい	**6**
いいえ	**0**
合計	**6**

Q2．授業を通して何か興味を持ちましたか

はい	**6**
いいえ	**0**
合計	**6**

「はい」と答えた人は、一番興味深かったことや印象に残ったことは何ですか（一部抜粋）
・現地の様子や、現状など日本が当たり前でないということを痛感できました
・住民とFESTのみなさんの関係が深められるようなニーズ調査をしていること
・ゴミが毎年43万トンも山積みになってしまうこと
・ゴミ問題がいかに深刻か改めて考えられた
・日本のゴミ問題より深刻なことがわかった

Q3．もっと知りたいと思ったことはありますか

はい	**5**
いいえ	**1**
合計	**6**

4.授業の感想を自由に書いてください（一部抜粋）
・今日は、学びになる講義をありがとうございました。 グループで、ゴミ問題についてのプロジェクトを考えた時に、その地域にあったプロジェクトをすべきだと実感しました。そして、それを考え、実行することの難しさを感じました。 講座後、FEST TOKYOの大学生さんが質問に気さくに答えてくださったり、アドバイスをしてくださり、とても参考になりました。 この講座を通して、世界や将来に対して視野が広がりました。大学生になったら、ぜひFEST TOKYOさんに入団してみたいです！本日はありがとうございました。
・貧困層の多いことに驚きました。与えることだけが援助ではないことに気付けました。

6.廃校文化祭



概要
・日程：2026年6月14日（日）
・時間：12:00〜17：00
・場所：みらい館大明
・対象：不特定多数

目的・目標

目的	今期の副目的である「(FESTが）国際協力に知識のない人たちは、 何に興味・関心を持つか発見する」について調査する
目標	・15人以上に投票してもらう ・興味を持ってもらえた写真を分析可能な量のシールを貼ってもらう ・どんなところに興味を持ったのかを声をかけてみて質問する

内容
学生団体廃校文化祭実行委員会CSFさん主催のてるてるまつりで、青空ギャラリーを行った。青空ギャラリーとは、青空の下で開かれる展示会のことであり、フィリピン・セブ島やBlockIII内で撮影した写真とともに、写真に関する短い説明文を展示した。
来場者にシールを配り、12枚の写真の中から興味を持った写真を3枚選んで投票してもらった。







結果
学生16人、大人3人の合計19人に投票してもらうことができた。
国際協力に興味のない人からの主な投票理由としては「名前がかわいいから」「おいしそうだから」などが多く聞かれ、国際協力に興味がある人からは「現地での活動写真などがもともと好きだから」といった声が聞かれた。
今回のイベントの来場者は、国際協力に対して興味がある人が少数であったため、支援に関する写真への投票が少なかったと考えられる。

使用した写真と、投票してもらったシールの枚数は以下の通りである。

17(2)	ジンベイザメ
15(1)	ハロハロ
8	井戸
7(1)	プソ
6	お菓子
5(1)	ニワトリ
4	サリサリストア
4	タホ
4(2)	フィッシュマーケット
3	支援地域の子どもたちとのプロジェクトの様子
3(2)	ニーズ調査
2	フィーディング

※（）内の数字は、シールのうち大人の」方に貼ってもらった数。その他は学生。
　井戸は3枚重複票あり。

7.中野セントラルパークフリーマーケット

概要
・日程：2026年10月4日（日）
・時間：10:00〜16:00
・場所：中野セントラルパーク
・対象：不特定多数

目的・目標

目的	幅広い年齢層かつ国際協力に知識・興味のない人たちが、 国際協力に興味を持つきっかけをつくる
目標	国際協力に馴染みのない人たちに、ステッカーやポストカードなどの商品を通して 現地での活動の様子を伝え、国際協力に興味を持つきっかけをつくる

内容
国際協力に対して知識のない人も多く来場されるフリーマーケットに出店し、FESTのグッズの販売を行った。販売した商品は、以下の通りである。

・BlockIII内の写真やBlockIIIの子どもたちが描いた絵を載せたポストカード（100円）
・子どもたちが書いた絵のステッカー（300円）
・子どもたちと作ったミサンガ（100円）
・子どもたちと作ったビーズアクセサリー（100円）

また、募金箱を設置した。
お客さんが立ち寄ってくださった際には、販売している商品やFESTの活動について簡単に説明をした。



結果

販売商品および募金	売上個数/募金人数	合計金額
FESTのメンバーが撮影したBlockIII内の写真や 子どもたちの絵が載せられたポストカード	7個	700円
子どもたちが描いた絵のステッカー	4個	1200円
子どもたちが作ったステッカー	3個	300円
子どもたちが作ったビーズアクセサリー	4個	400円
募金	2人	600円
合計金額		3200円

今回のフリーマーケットでは、合計3200円の売り上げを得ることができた。
出店中、以前の期でフリーマーケットに参加した際に商品を購入していただいたお客さんから声をかけていただくこともできた。FESTの活動について話した内容を覚えてくださっていたことは、FESTの啓発活動が意味のあるものだということの証明となった。



8.結果・まとめ

16期では主目的のほかに、「(FESTが) 国際協力に知識のない人たちは、何に興味・関心を持つか発見する」という副目的を立てた。また、その副目的に対して、「複数の手法を用いて多角的な知識提供を行い国際協力の知識がない人たちが何に興味・関心を持つのか探る」という目標を立てた。
今期で行った3回の出張授業と2回のイベントを通しての結果をまとめる。

5-1.八千代松陰中学・高等学校、5-2.藤沢翔陵高等学校での出張授業では、メインの内容であるフォトランゲージでニワトリ、支援地の住民の雰囲気、PJ対象者のビジネスの3つを大きく取り上げたが、興味を持ったこととしてニワトリが最も多く挙げられた。
5-3.八千代松陰中学・高等学校ではニワトリについてはビンゴ大会で少し紹介した程度であり、課題解決ワークショップのテーマであったゴミ問題について印象に残ったという回答が多かった。
廃校文化祭では、国際協力に興味のない人はジンベイザメやハロハロなどの写真に興味を持っていた。国際協力に関係する支援地での活動の様子などに興味を持ってくださった方は、理由を尋ねると国際協力に興味があるという回答であった。
フリーマーケットでは、ミサンガは大人の方、ビーズアクセサリーは子どもに多く手に取っていただいた。ポストカードは、子どもたちが描いた絵で作成したものを5種類、支援地内の写真を2種類販売したが、写真のポストカードを選んだ人はいなかった。

以上のことから、授業では大きく取り上げたことの印象が残りやすいことが分かった。また、国際協力に対して興味がない人は、おいしそうな食べ物や観光に関すること、動物などにまずは興味を持ちやすいことが分かった。国際協力に興味のある人は、活動の様子や住民が移っている写真に興味を持っていた。
国際協力に興味に興味があるかどうかによって、興味を持って知ろうとする内容に差があることが分かった。
国際協力に興味がない人を対象として啓発を行いたい場合には、まずは観光地や食べ物、動物などの、支援活動とは関係のないハードルの低い部分からアプローチしていくべきだと考えた。

反省としては、授業やイベントごとに紹介した単語や内容が異なっていたため、同じ条件で調査をすることができなかったことが挙げられる。しかし、全体としてどの層はどのようなことに興味・関心を持つかの傾向を知ることができたため、来期以降も誰に対して啓発をどのように行うのかを明確に定め、より効果的な充実した啓発活動を行ってほしいと思う。

9.来期展望

16期では、「国際協力に知識のない人たちが、新しい知見を得て興味へと繋げる」という目的のもと活動をおこなってきた。そして、八千代松陰高校での出張授業を2回、藤沢翔陵高校での出張授業を1回と、計3回の出張授業をおこなうことができた。また、フリーマーケットでの出店のほか、廃校文化祭などのイベントにも参加することができた。特に出張授業では、中学生と高校生に対して授業をおこない、新たな視野を得ることができたと言ってくださった生徒もいた。ここまで多くの出張授業をおこなえたのは、つながりをたくさん作って、海外事業部の活動もあるなかで、国内フォトワーク事業部に熱を注いでくれた16期の国内フォトワーク事業部のメンバーのおかげだ。来期、そしてそれ以降にもそのつながりを引き継いでいき、さらに多くのつながりを作って、FESTが考える国際協力や、国際協力の魅力を広げていきたい。特に出張授業は継続して続けていき、そのほかイベントに積極的に参加していきたい。



その他の活動

1. ETHICAL CAMPUS
2. ルーキワークス　～ガクチカワーク～
3. NPO×学生・次世代　交流イベント①

1. ETHICAL CAMPUS

全国の社会貢献活動を行っている学生団体が集い、学生同士や企業に対して発信し、視野を広げるためのイベントに参加した。他団体の活動について聞いたり、FESTの活動について紹介したりして交流を深めた。



2. ルーキワークス　～ガクチカワーク～

ルーキーワークス株式会社様の「ガクチカワーク」という企画に参加させていただいた。具体的には、取材を受け活動紹介の記事を掲載していただいた。



3. NPO×学生・次世代　交流イベント①
共感から、行動へ。～社会と関わりが、自分の未来につながる。～

普段、活動場所として使用させていただいている新宿NPO協働推進センターから提案を受け、6月27日にイベントに参加し登壇した。団体説明と活動紹介を行った。

メンバー個人コラム

武田郁

橋元凛人

吉武ちひろ

田中大翔

大森真優子

古賀玲菜

永島歩奈

村瀬かのん

武田郁
大学2年
代表



【FESTでの活動】

私は大学1年の春にFESTに入会し、国内フォトワーク事業部の一員として活動していました。直接支援に関わるというよりも、より多くの人に支援とは、FESTとはを伝えるためにどうすればいいかを日々の活動で、新人なりに試行錯誤していました。初渡航では、先輩について行くだけで精一杯でしたが自分の中で国際協力とは何か、自分ができることは何かを突きとめたいと改めて思える渡航でした。15期の個人コラムにはそんな自分の思いを綴り16期という新たな期が始まることに少しの不安を抱きながらもワクワクしていました。今では懐かしいなと感じるとともに、時間の速さと濃さに驚いています。そんな中16期が始動し、私は国内フォトワーク事業部長として16期の運営、国内フォトワーク事業部のことと一気にFESTが自分の中でついて行く活動でなく主体的に動く活動になりました。初めはわからないことも多く、また進め方が非効率であったり至らぬ点が多い中でメンバーやOGの皆さんに助けてもらい、国内フォトワーク事業部の基盤である目的・目標が決定し出張授業、イベントへの参加など啓発活動に励みました。16期初めての渡航である春渡航では、国内フォトワーク事業部として行う事は写真撮影のみでした。人数が少なかった事も合間ってか海外事業部の一員のように動いていました。そのため国内フォトワーク事業部あるあるなのかもしれませんが、自分は春渡航でどれだけ海外事業部が普段どのようなことをやっていて、今渡航で行うことは何かを把握しておくことが大事なのか痛感しました。住民からしたら国内フォトワーク事業部だから支援内容を海外事業部のメンバーと同じように理解していないといった言い訳は、ただの甘えであり、私たちは住民の生活を背負って活動していて渡航しているという重要なことに気づくことができ、自身の支援に対する甘さを情けなく感じるそんな渡航でした。

また、春渡航で一気にFESTの支援を深く理解できたと思います。春渡航が終わったタイミングで代表に就任し、ここでも自分の中でのFESTの位置付けが変わった気がします。どのように代表として活動に参加すべきなのか、代表とはどのような立ち振る舞いでいるべきなのかたくさん悩み、日々考えながらも常にFESTに向き合っていた半年間でした。自分の中で自然とFESTが当たり前のように生活の一部としてなされていました。代表に就任してからは、海外事業部の会議についていけるように、また外部の方にFESTをきちんと説明できるようにFESTについて勉強する所から始めました。歴代の渡航報告書を読んでいくうちに、16年間続いている歴史の深さから自分の役割への責任感を感じ同時に怖さも感じていたような気がします。それでも今思い返すと、自分の中にあった重圧や怖さは常に代表として私を奮い立たせていました。夏渡航では、新メンバーもいる中で自分が最高責任者となり、不安と危機感を常に持ちながら2週間過ごしました。それでも頼もしいメンバーに恵まれ私が代表として何かすることなく、渡航を終えることができ、私はメンバーにとても感謝しています。そして渡航後は出張授業やフリマでの啓発活動を行い16期としての幕を閉じました。

長々と私がFESTに入会してから卒業するまでのことを綴ってきましたが、ここからは私がFESTの活動を通して感じたことをお話しできたらと思います。振り返ってみると、私は高校を卒業するくらいの頃から常に自分が嫌なことから逃げて生きる人でした。そのためいつしか自分がやると決めたことを最後までやり遂げることが難しく、そしてそんな自分に自信がない人間でした。そんな中FESTに出会い1年半という短い期間ではありますが、自分でやると決めたことをやり遂げることに達成しました。皆さんからしたらそんなの簡単よと思うかもしれません。しかし、私からしたら最後までやり遂げたというのは自分の自信を取り戻すことができた大きなことなのです。いま現在振り返っても私がFESTの活動をやり切ったと思えていることは2、3年前の私からしたらとても難しいことで、想像もできなかったことです。FESTは私を人として成長させてくれた大切な存在になりました。

そして私は、FESTに入ったことによってたくさんの出会いがありました。それは、外部の企業の方、国内の活動で出会った生徒、お客さん、支援地の住民、子供達、そしてメンバー、先輩方。たくさんの人に出会うことができました。私は、国際協力、ボランティアに興味があって、フィリピンという国が好きでこの団体に入りましたが、1年半の間活動を続けることができたのはFESTに関わる全ての人がいたからだと思っています。私一人では国際協力はできない。これは16期になり、多くの人が辞め一番痛感したことです。私が担当していないことも誰かが担ってやってくれている。そして団体が成り立っている。代表になって心底感じた事でした。今では気づかず活動していた事に申し訳なさを感じています。
春からついてきてくれた後輩のみんな、何より一緒に16期はじめから最後まで活動した同期のみんな！本当に心から感謝しています。
私に勇気と暖かい笑顔をくれて、たくさんの新しいことを学ばせてくれた住民の皆さん、会えなくなるのが寂しいですが元気でいてくれることを願っていますそして本当に感謝しています。（salamat ❤️）

そして、16期を支えてくださった全ての皆様に本当に感謝しています。ありがとうございました。17期も頼もしいメンバーばかりですので、引き続き温かく見守っていただけると嬉しいです。そして私もこれからのFEST TOKYOを心から応援しています！頑張ってください！1年半の間お世話になりました。ありがとうございました。

橋元凛人
大学2年
海外事業部　部長



【FESTに入団した理由】

私は小学生の頃、父の仕事の関係でニューヨークに住んでいました。ニューヨークでは大都市にも関わらず、すごくやつれたホームレスがたくさんいます。それまで日本でそのような人々をあまり見てこなかった私にとって実際に目の当たりにすると大きな衝撃でした。この出来事がきっかけで、世界中の誰か、困っている人のために小さくてもいいから支えになりたいと思うようになりました。大学生になりこの団体ならこの思いを体現できると考え、入団しました。

【FESTの活動を通して】

私は、FESTの活動を続けて今回で2期目となります。私は、1年前FESTの活動を通じて、様々な人がしっかりと自分の意見を持ち、本気で誰かのためになりたいと思っていることに気付かされました。あれから海外事業部長という役割を任され、１年間活動した中であの頃感じていたことの意味をより深いところで理解できるようになったと感じています。部長になって最初に実感したのは、「発言しやすい」という環境は自然にできるものではなく、誰かが意識をして作らないと崩れてしまうということでした。学年に関係なく本気で議論できる場を守るために、私自身がまず自分の意見を明確に持ちつつも、それを押し付けず、一人ひとりの考えを引き出す聞き方を心がけるようになりました。メンバーの発想に驚かされる楽しさは変わらず、むしろ部長としてその声を企画に落とし込む責任を負う中で、自分一人では到底思いつかない案が形になっていく過程に、以前以上のやりがいを感じるようになりました。同時に、部長という立場は「考える」だけでなく「決める」ことを求められる立場でもありました。国際支援の理想的な支援のあり方や支援地の人々の本当の幸せとは何かという問いは、1年経った今も明確な答えを出せたわけではありません。むしろ現地の方々と対話を重ね、メンバーと議論を重ねるほど、その問いの奥行きに気付かされることの方が多かったように思います。それでも、答えのない問いに対して立ち止まらず、チームとして一歩ずつ判断を積み重ねていくこと自体が、国際支援に携わる上で欠かせない姿勢なのだと、この1年を通じて実感しました。答えを急がず、問い続け、考え続ける姿勢を大切にしながら、これからも仲間と共に自分たちなりの答えを形にしていきたいと思っています。

【渡航後の思い】

私は、セブへの渡航はこれで3回目となり計算してみたら1年のうちの1ヶ月以上は、セブ島で過ごしています。行く度に、この街が少しずつ形を変えているのを感じます。新たなショッピングモールができ、道路や建物が整備され、現地の人々の暮らしにも確かな変化がある。渡航の度に、フィリピンという国の経済力が着実に上がっているのだと実感させられました。

一方で、前回の渡航で約束したはずのことが、いつの間にか忘れられていたり、期待していたことが裏切られるような出来事もありました。正直、行き詰まりを感じる瞬間も少なくなかった。けれど不思議なことに、こちらが特に期待していなかったことを、現地の人々がずっと続けてくれていた場面もあり、その積み重ねが、今回のプロジェクトの可能性を広げてくれたように思います。日本のような紙の契約書での約束が守られるかどうかだけでは測れない、もっと別の形の信頼関係がそこにはあるのかもしれないと考えるようになりました。

現地では、日本という国に対して羨望のまなざしを向けられることが多いです。豊かで、便利で、清潔で、憧れの対象として語られます。けれど、それは本当に「豊かさ」を意味しているのだろうかと、渡航を重ねるたびに疑問を持つようになりました。貧しさというものは、その国単体で生まれるのではなく、周辺国との関係や社会制度、そしてそこに生きる人々の国民性が複雑に絡み合って生まれてくるものなのではないかと考えます。経済的な豊かさは、数字で測ることができます。しかし、豊かさと呼ばれるものは、結局のところ経済をあくまで一つの指標として置いたうえで、個人として何があれば自分が豊かだと感じられるかによって変わってくるのではないだろうかと考えました。例えば、日本を豊かだと思う人がいれば、そう思わない人もいる。それはフィリピンにおいても同様です。個人個人の豊かさとは、一人一人が生きてきた中で培った価値観と、その人にとってその国がどのように関わり、何を与えてくれているかという実感によって決まるものなのではないかと考えました。

豊かな国から来た人と豊かでない国の対象者という権力構造が国際協力では非常に生まれやすいです。こうした権力構造は、支援する側とされる側という構図を固定化させ、対等な関係を築く上での障壁になります。けれど渡航を重ねるうちに、本当に一方的な関係なのだろうかと考えが揺らぐこともありました。「与える側」だと思い込んでいる間にも、実際には時間をかけて築かれる信頼や、自分たちの当たり前を問い直させてくれる視点を、こちらが受け取っています。だとすれば必要なのは、豊かさの物差しを一方が勝手に持ち込まないことなのだと思います。経済指標だけで優劣を判断してしまえば、そこには必ず上下の構図が生まれる。相手の豊かさの物差しを尊重し、自分の物差しを押し付けない。その姿勢を渡航のたびに問い直し続けることこそが、国際協力に関わる者に求められているのではないかと、今回のセブでの日々を通して改めて感じました。



吉武ちひろ
大学2年
国内フォトワーク事業部　部長

FESTとして活動した約1年半という時間は、私にとって今までの人生で1番価値観が変わった経験となりました。
私はFESTでたくさんの経験をして、得たことと同じくらい、「幸せとは何だろう」など疑問に思うようになったことが増えました。自分自身が成長できた時間であるのと同時に、未熟さや力不足を感じた時間でもありました。しかし、FESTでなければその疑問を持つこともできなかっただろうと思います。
私は15期夏、16期春、そして16期夏と合計3回の渡航をしましたが、どの渡航でも違った緊張がありました。15期夏は初めての渡航であり、同時に私にとって初めての海外経験でもありました。16期春は、代替わりをして、自分たちが主となって活動をする渡航でした。16期夏は、新しくメンバーが増え、自分が一番渡航経験の多いメンバーとなりました。だんだんと自分のFESTでの責任が大きくなっていくのを感じました。
私は15期の春に国内フォトワーク事業部として入会し、日本で行う啓発活動について考えました。FESTとしての渡航どころか海外にすら行ったことがなかった私は、自分に何が伝えられるのか分からず、ほとんど意見を出すこともできませんでした。それが、渡航に行ってみて、自分にも伝えられることがたくさんあると感じられて、積極的に自分の考えを声に出してみるようになりました。

支援地域の住民は、貧困地域に住んでいるとは思えないほど明るくて、いつも笑顔が耐えなかったです。金銭的に裕福でなかったり、衛生面の管理が不十分とは言えない環境だったり、生活するうえでの苦労は想像ができないけれど、渡航中に住民に対して1度も可哀想などとは思いませんでした。私が3回目の渡航に行ったときには、1人の子どもに、「前の渡航までしていた歯列矯正はどうしたのー？」と聞かれました。そんなことまで覚えてくれているのだと驚きましたし、子どもたちの記憶に自分たちがしっかり残っているということが嬉しかったです。
1年半ずっとずっと考え続けてきた大好きな地域は、次の世代に引き継がれます。そのときの現役メンバーが、そのときの地域と向き合ってプロジェクトを行います。きっとまたフィリピンに行くことがあっても、もう一度BlockIIIという地域に戻ることはないと思います。もう簡単に足を踏み入れることはできないのだと思うと、寂しいという言葉だけでは表せないような感情になりました。
もともとは何のつながりもなかった一人ひとりが、それぞれの思いを持ってFESTに集まり、同じ地域に向き合いながら、支援について本気で考えてきました。FESTでしか出会うことのできなかったメンバーと一緒に悩み、活動できた時間は思い出です。あのときFESTを選んで入会して良かったと心から感じます。ありがとうございました。



田中大翔
大学2年
海外事業部兼国内フォトワーク事業部

【幼いころからの東南アジアへの思い、そしてFESTへの入団】

私が東南アジアに関心を持ち始めたのは、私の家族同然のお手伝いさんと、私が飼っていたクワガタだった。一緒に暮らしていたお手伝いさんはフィリピン人の方で、飼っていたクワガタも東南アジアの原産だったこともあり、物心がついたころには身の回りに東南アジアが溢れていた。小学生の頃は、その自然の豊かさに何かしらの神秘性を感じたものだ。中学、高校に上がっても東南アジアへの関心は依然として高かったが、私の関心は自然から、人や文化、政治など、社会的なものへと変わっていった。その中で、とりわけ私の関心を引いたのが貧困やゴミ問題などの社会課題だ。調べてみると、このような諸問題に対して日本政府は戦後多くの支援をしてきたそうだ。しかし、このような国際協力は「寄付」や相手の立場や気持ちを考慮しない、いわゆる「一方的な支援」。さらに、一部の「国際協力」は、利益まで求めている、まさに資本主義の社会構造の中に国際協力が埋まっているわけだ。そんな国際協力のあり方に、なにか、憤りのようなものを感じていたと思う。「本当の国際協力とは何か？」自身の問いを大学生活を通して深く考えたいと思っていた。そんな中で、FESTと出会った。「向こう見ずな支援を無くす」ことを理念に掲げるFESTでなら、より良い国際協力のあり方を追求できるのではないか？そのような思いを胸に、FESTへの入会を決めた。

【今期を含め、この2年間の活動を通じて】

この2年間、「本当の国際協力とは何か？」を考えながら活動してきた。しかし、無論答えは導き出せていない。私は15期では国内フォトワーク事業部に所属していて、16期は海外事業部と国内フォトワーク事業部の双方に身を置いて活動した。その中で、他のメンバーも、そして私自身も多くの壁にぶつかってきたと思う。16期が始まった当初、海外事業部で白熱したプロジェクトの話し合い。マイクロファイナンスや他のNGOとの協働、ハンドメイド商品の販売など、FESTが考えるBlockIIIの阻害要因「初動機会の不足」を解消するためのプロジェクトを議論しあった。議論が白熱することが多かったが、それぞれのメンバーが考えるより良い国際協力をお互いにぶつけ合えた機会だったと思う。また、国内フォトワーク事業部では、今期の目的と目標について頭の中でこんがらがりながら議論したことが今でも強く印象に残っている。私は2回しか出張授業に行くことができなかったし、イベントも、フリーマーケットしか参加することができなかった。しかし、出張授業をしている際の生徒の真剣に聞いている様子や、笑顔などはまるで昨日のように思い出すことができる。とても充実していたし、なにより国内フォトワーク事業部の活動に充実感を感じることができたのは、メンバーの支えがあったからだと実感している。支援地でも様々な課題に直面した。住民との言語の壁から、これでもかというくらいにおこなうニーズ調査への精神的な不安まで、幅広く。私はプロジェクトの実行のためにニーズ調査を頑張らなければとも思ったし、一方で、住民がどのような気持ちでニーズ調査をしてくれているのか、そんな葛藤も抱いた。しかし、FESTを通してたくさんの出会いもあった。そもそも異なる大学で学んでいるメンバーとの出会い、そして笑顔がまぶしいフィリピンの優しい人たちとの出会い。出会いの中で、国際協力の「支援者」とは、「与える人たち」ではないことを実感した。むしろフィリピンの人たち、BlockIIIの住民、そしてメンバーに支えられて国際協力ができていると身をもって知った。今期はメンバーに本当に迷惑をかけたと思っている。しかし、他のメンバーの優しさや支えがあって、今もここにいることができている。これからもメンバー同士で協力し合い国際協力に望んでいきたいと思う。

大森真優子
大学1年
海外事業部



【FESTに入団した理由】

このような学生団体には国を超えた交流に興味がある人やボランティア活動に熱意を持った人が多く集まると思います。しかし私が入団したのは、「人の役に立ちたい」「誰かを助けたい」という素敵な理由ではなく、ただ言い訳を作るためでした。私は高校時代の経験を生かし大学では体育会系の部活に入るつもりでした。それを目標に大学を決めましたし、受験勉強中も合格後も入部をモチベーションに過ごしていました。しかし大学入学後の新歓期間を経て、大学の４年間を夏休みも春休みも返上し体育会の部員として過ごす覚悟が揺らいでしまい、結局入部できませんでした。その後は他のサークルの新歓に行く気になれずどうしようか悩んでいた時、友達がFESTの新歓に行こうと誘ってくれたので参加してみる事にしました。入団の決め手は前述したように自分にとっての言い訳になるからです。私が入部しようとしていた部活は留学禁止なうえ一週間のまとまった休みもありませんでした。体育会の部活に入っていたらできなかった海外経験をすれば体育会に入る覚悟がなかった自分への言い訳となり、自分の覚悟の弱さを肯定できると考えました。本気で国際活動に貢献したいと思っているFESTの方々には失礼すぎるくらいに自己中心的ですが、これが私のFESTに入団した理由です。

【FESTの活動を通して】

FESTがこれまでやってきたことやその活動の根源となる理念を理解するために毎週の活動に加え休日の活動にもできるだけ参加しました。FESTには渡航までの細かい手順やルールが存在します。FESTの活動が楽しいというよりも、そのようなものを理解しようという思いで活動に参加していました。議論を重ね、活動内容を理解するとともに学生団体としての限界を感じることがありました。金銭支援を行わない以上、思考することと行動することでしか支援ができません。その支援は相手（支援地の方々）が本当に望んでいることなのか、その支援で本当に相手の暮らしが良くなるのかとネガティブに考えてしまいます。自分たちの活動に成果を見出すための自己満のプロジェクトになってしまう事は避けたいと思っています。「支援」という形ではありますが、他者の生活に足を踏み入れているわけですから私たちの活動に協力してくれている人たちがFESTに協力してよかったと思ってもらえるものを必死に考えなくてはならないと思います。こういった点が私には難しい課題です。しかしこのように思う反面、歴代のFESTの先輩方は金銭支援なしでここまで支援地の住民との関係を構築してきたと思うと本当に一生懸命考えて活動しているのだと感じます。私はこれまで海外にそこまで関心はありませんでしたが、尊敬できる先輩方との活動を通して海外という広い範囲に自分の関心の幅を広げることができました。FESTの一員としての自分の活動に疑問を感じることもありますが、自分の関心の幅を広げることができたのはFESTに入団したからこそであり、世界に対して自分の考えを持とうとしたこの半年間は間違いなく私にとって良い経験となりました。

【渡航後の思い】
ボランティアの在り方に対する考えが大きく変わりました。ボランティアには支援する側と支援される側が存在し、支援する側が与え、される側が受け取るという構図が私の中での観念でした。しかし今回の夏渡航で私は支援地の住民の方々から多くのことを学びました。特に印象に残っているのはKという9歳の女の子の行動です。ある活動日に私は数人の子供達とバレーボールをしていました。その時、私が飛ばしたボールが住民のバイクのナンバープレートに当たりナンバープレートが落ちてしまいました。ここで私は大人の住民に謝りに行くべきです。しかし誰のバイクなのかもわからず、誰に言ったら良いかわからないでいた時Kがきて「It’s ok.」と代わりに大人に言いに行ってくれました。Kに着いて行くと明らかに怒られている雰囲気でしたが、私が壊したとは決して言いませんでした。普通は出会って数日の他人のミスを庇うことは容易ではないと思います。しかもKは9歳です。その心の豊かさと優しさに驚き、自分の幼稚さに恥ずかしさを感じました。私は自分より10歳も年下のKの行動をおそらくずっと忘れないと思います。今回の夏渡航では私が支援地の住民に与えたものより与えられたものの方がはるかに大きいです。この渡航を通して、FESTである以前に誰かに何かを与えられる人でいたいと思いました。そしてこの気づきをくれたBlockIIIという地域を大切にしたいと思います。
今後私がFESTとして活動を続けても続けなくてもFESTで学んだこと、フィリピンで学んだことを糧にしたいと思います。４月の自分が、目標だった部活に入らなかったからこそ得られた経験を大切にもっと柔軟に大学生活を送りたいと思います。

古賀玲菜
大学1年
海外事業部



FESTに入団した理由】

チームで本気で国際協力に携わりたいと思い、FESTの理念にも強く共感したため入会を決めました。高校2年の頃から貧困問題や開発途上国支援に関心を持ち、国際協力を行っている方の話を聞く中で現地のニーズに沿った支援の重要さに気づかされました。開発途上国支援に関心を持っているだけで支援の現場を見たことがない私は、高校卒業後に何かしらの形で国際協力に携わりたいと思い様々な団体を調べました。その中で「向こう見ずな支援をなくす」「住民主体の支援を行う」というFESTの理念に強く共感しました。

学生団体に所属する以外にも短期留学など国際協力には様々な形がありますが、私はチームに属し時間をかけて何かを成し遂げる経験をしたいという思いがあったため学生団体に所属することを決めました。他の団体の見学会にも参加しましたが、私が理想とするような国際協力を本気で行うことができるのはFESTしかないと感じました。もともと人と話すことやチーム作業が好きだった私は、本気で仲間と話し合い壁にぶつかる中で、同じ目標のために全力で活動することに強い憧れを感じていました。見学会で先輩方から「FESTは、悩んだり上手くいかないことの方が多い」と聞きましたが、そんな環境だからこそ本気で国際協力に向き合い、自分自身も成長することができると確信しました。学生にしかできない支援をFESTで行いたいと思い、入会しました。

【渡航後の思い】

今回の夏渡航で感じたことを一言で言うと「国際協力は本当に難しい」です。具体的には、現地の人々との関係構築の難しさを痛感し、渡航では悔しい思いをしたこともありました。そのため正直言うと、まだFESTとしても個人としても納得感はあまり得られていません。FESTは物資・金銭支援をせずに住民主体の支援を目指しているため、現地の人からの協力を得ることの難しさを強く感じました。そして、学生である以上年に2回の渡航しかできず、活動の多くを国内で行うため現地との対話の難しさも強く感じました。

そのため、渡航を通して初めて気づくことが多くありました。多くの発見がありましたが、その中でも支援地の住民同士の仲がとても良さそうだということです。多くの住民は家族と幸せそうに生活しているため、支援を行おうとする日本人の大学生がその地域に行く意義が分からなくなることもありました。だからこそ次の渡航では関係構築を丁寧に行いたいと考えています。支援を通して現地の住民の生活に関わっている以上住民からの信頼の獲得は欠かせません。特に、FESTは現地のコーディネーターなどがいないため、より自分たちの力で関係を築く必要があります。関係構築は簡単なことではないですし、私がFESTとしての活動を終える頃に納得ができているかは分かりませんが、これからの活動を通して探究していきたいと考えています。

永島歩奈
大学2年
海外事業部



大学に入学したら、国際交流に関わることをしてみたいと漠然と思っていました。大学1年生の頃には日本語教室で日本語を教えるボランティアをしていましたが、春休みにオーストラリアへ留学したことをきっかけに、その活動を辞めました。初めて海外で生活する中で、現地の人やその土地にたくさん助けてもらった経験から、今度は自分が海外の人や地域と関わりながら何かをしたいと思うようになり、大学生が参加できる国際交流団体を探し始めました。その中でFESTを知り、私たち大学生ができることには限りがあるからこそ、現地の方のニーズに寄り添い、自分たちにできる形で関わるという考え方に惹かれました。学校を建てたり、多額のお金を支援したりすることはできなくても、現地の方と実際に関わりながら活動できることに魅力を感じ、FESTに入ることを決めました。

FESTに入ってから渡航するまでの間、週に1度の話し合いに参加しながら、渡航に向けた準備を進めました。授業の関係で、最初から参加できないことがほとんどでしたが、ほぼ毎回何かしらの形で活動に参加していました。渡航が近づくにつれて、渡航前に必要な資料を作成したり、現地で行うプロジェクトの内容を詰めたりと、準備も忙しくなっていきました。しかし、準備を重ねる一方で、どこか現実味がないようにも感じていました。実際に支援地に行ったことがない自分にとって、現地の様子を想像しながら意見を出すことには難しさがありました。「こうしたらいいのかもしれない」と思っても、本当にそれでいいのか分からない。意見を求められても、自分の中ではどこか「？」がついたまま考えているような感覚でした。

実際に渡航してみると、今までの知識や考えてきたことが線になって繋がるような感覚でした。「この場所が写真で見ていた場所か！」「この人がいつも話し合いで出てくる人か！」といったように、今まで頭の中で想像していたものが、実際の場所や人として目の前に現れていきました。

支援地に入ると、写真では伝わらなかったこともたくさんありました。匂いや動物、人の声など、実際にその場所に行ったからこそ感じられるものがありました。最初はニワトリや虫に抵抗を感じることもありましたが、何日も通ううちに、そうした環境にも慣れていきました。日本での当たり前が、そこでは当たり前ではない。逆に、そこでの当たり前が日本では当たり前ではない。そのことを、知識としてではなく、生活の中で実感しました。

また、渡航中には自分自身の行動について考え直す出来事もありました。ニーズ調査のために訪問した家で犬と触れ合ったことで、狂犬病ワクチンを受けることになりました。ニーズ調査のために訪問していて、住民の方も親切に受け入れてくださっていたため、「ここで断る」という選択肢が自分の中にはありませんでした。自分が少し怖いと感じていても、せっかく受け入れてもらっているのだから、調査を続けなければいけないと思っていました。その後、ワクチンのために、病院で長時間待機することになり、一緒にいたメンバーにも負担をかけました。この経験から、活動のために頑張ることだけが正解ではなく、自分や周りの人の安全を考え、やらないという判断をする勇気も必要だと実感しました。

もちろん、楽しいことや嬉しいこともたくさんありました。支援地の子どもたちは、毎日会ううちに名前を覚えてくれたり、調査についてきてくれたり、「次いつ来るの？」と聞いてくれたりしました。最終日に泣きながら手紙を渡してくれた子を見て、またここに戻ってきたいと思いました。住民の方からいただいた現地の食べ物を食べたり、ホテルの方や他の宿泊者の方と交流したり、今までなら少し躊躇していたことにも「とりあえずやってみよう」と思えるようになったことも、今回の渡航で得た変化の1つです。

2週間の渡航を終えて、渡航前についていた「？」がすべてなくなったわけではありません。むしろ、実際に現地を見たことで、新しい疑問や考えたいことが増えました。だからこそ、今回の渡航は、自分の目で見て、自分で考えるためのきっかけになったと思います。渡航前は写真や話し合いを通して想像することしかできなかった支援地が、今ではそこで出会った人たちの顔や声とともに思い浮かびます。これからは、今回感じた疑問をそのままにせず、FESTでの活動を通して考え続けていきたいです。

村瀬　かのん
大学２年
海外事業部



【FESTに入団した理由】

私は小さい頃から海外旅行に行く機会が多く、外国に行くことが好きでした。特に小学生の頃に訪れたアメリカで、現地の方に優しく接してもらった経験が今でも印象に残っています。その経験から、いつか自分も外国の人のために何かできるようになりたいと思うようになりました。海外に行くたびに、ただその国を訪れるだけではなく、一つの国や地域と継続的に関わりながら活動してみたいと思うようになりました。そんな時に出会ったのがFESTでした。国際協力団体の中には、子どもたちへの支援を中心に活動している団体が多くあります。その中でFESTが子どもだけではなく、現地で暮らす大人にも目を向けているところに惹かれました。海外が好きという気持ちを単なる興味で終わらせず、外国と長く関わりながら、自分なりに国際協力について考えてみたい。そう思い、入団を決めました。

【FESTの活動を通して】

入団してすぐの頃は、正直、自分の意見を言うことに少し抵抗がありました。FESTについても国際協力についても分からないことが多く、「こんなことを言ったら的外れなのではないか」と考えてしまっていたからです。一方で、周りのメンバーは問題分析が早く、それぞれが自分の考えをしっかりと持っていました。意見を出し合いながら、一つのことについて何度も議論している姿を見て、自分の未熟さを感じることもありました。それでも、メンバーが楽しみながらも真剣に活動している姿を見るたびに、「自分ももっと頑張りたい」と思うようになりました。活動を重ねる中で、正解を知ってから意見を言うのではなく、分からないからこそ自分なりに考え、言葉にしてみることが大切なのだと少しずつ感じるようになりました。FESTでは、国際協力について考えるだけではなく、自分とは違う考えを持つ人と一つの目標に向かって活動します。その中で、自分一人では思いつかなかった考えに出会ったり、自分の考えを相手に伝える難しさを感じたりすることもありました。そうした経験を重ねるうちに、国際協力について考えることと同じくらい、自分がどのような前提で物事を見ているのかを考えることも大切なのだと思うようになりました。FESTに入る前の私は、「国際協力をする人」と「支援を受ける人」という関係をもっと単純に考えていたように思います。しかし活動を続ける中で、現地のことを知らない私が限られた情報をもとに「何が必要なのか」を考えることの難しさを知りました。だからこそ、渡航前から一つの答えに決めつけるのではなく、いくつもの可能性を考えること。そして、自分が正しいと思っていることも一度疑ってみること。それがFESTで活動する上で大切なのだと感じるようになりました。

【渡航後の思い】

今回は私にとって初めての渡航で、約1週間の滞在のうち、実際に支援地に入ったのは3日間でした。たった3日間です。それでも、帰国する頃には「絶対にここにもう一度戻ってくる！」と心から思っていました。BlockIIIの方々にとって、私は初めて会う外国人です。それにもかかわらず、気さくに話しかけてくださったり、ニーズ調査にも快く答えてくださったりしました。私が逆の立場だったら、突然知らない外国人が自分の生活する場所に来た時、同じように接することができるのだろうかと考えました。そのことも含め、3日間という短い時間の中で、たくさんのことを考えさせられました。特に印象に残っているのは、現地の環境です。虫の多さや身近さ、風通しの悪さ、匂い、道や家の狭さなど、これまでの私の生活とは大きく異なっていました。しかしそこで暮らしている方々にとって、それは「特別な環境」ではなく、毎日の生活そのものです。そこで私は、自分が現地の暮らしを見て「大変そうだ」と感じたこと自体について考えるようになりました。私にとって大変に見えることが、その人にとっても同じように大変だとは限りません。反対に、外から見ただけでは分からない不便や困りごともあるかもしれません。3日間しか現地にいなかったからこそ、「分かった」と言うことの難しさを感じました。これまで私は国際協力というと、困っている人のために何かをすることだと思っていた部分があります。ところが、実際に現地へ行ってみると、そもそも何を「困っている状態」とするのか、何を「より良い生活」とするのかさえ、簡単には決められないことに気づきました。私たちは現地の人の生活をより良くするために活動します。でも、その「より良くする」という言葉を使う前に、誰にとって、何が、どのように良くなるのかを考える必要があります。そして、何が優先度の高い問題なのかさえ人によって異なります。今回の渡航を通して、私は国際協力の難しさを初めて自分の目で感じました。だからこそ、私は国際協力に対して、渡航前よりも答えを出せなくなりました。でも、それは悪いことではないと思っています。むしろ、簡単に答えを出せないからこそ、現地のことを知ろうとしたり、自分の考えを見直したりすることができるのではないかと思うようになりました。今回の3日間は、現地のことを知る時間であると同時に、自分が何を知っていて、何を知らないのかに気づく時間でもありました。まだ私はFESTに入って間もなく、国際協力について語れるほど多くのことを知っているわけではありません。だからこそ、今回感じた違和感や疑問を、分かったことにして終わらせたくはありません。なぜこの活動をするのか、現地の人にとって本当に必要なことは何なのか、そして学生である自分に何ができるのか。これからのFESTで、その答えを探し続けたいです。また、現地の方々と過ごす中で感じた明るさや笑顔のように、私も誰かの気持ちを少しでも前向きにできる人になりたいです。ですが、今の自分に何ができるのかはまだ分かりません。だからこそ、これからの活動の中で、自分なりにできる「何か」を見つけていきたいです。次にBlockIIIを訪れる際には、今回より少しでも多くのことを知り、少しでも成長した自分になっていたいです。

次期　代表挨拶

FEST TOKYO17期代表の古賀玲菜です。

私は16期の4月にFESTに入会し海外事業部に所属しました。
それから約半年が経ち17期からは代表を努めることになりました。
4月からの活動は、支援地の地域住民との関係構築や、学生主体で
プロジェクトを実行することの大変さを痛感した半年間でした。

しかし「向こう見ずな支援をなくす」ことを目指し、日々チームで１つの
目標に向かって活動することはとても楽しく、初めての渡航を終えたときは
大きな達成感がありました。FEST TOKYOは理念が明確にあり、
また少人数であるため壁にぶつかることも多くある団体ですが、
今後も「最良の国際協力を探求・実行・啓発」することを目指して
活動していきます。

17期は16期よりも少ない人数で始動します。卒業される先輩方がいるため、
より代表としての責任を感じ身の引き締まる思いです。そして新たな
組織体制でより良いチームを目指し、活動することがとても楽しみです。

私は活動を始めて1年目ですが、FEST TOKYOは創立17年目になります。
FEST TOKYO17期の代表として16年の歴史をもつFEST TOKYOの伝統を
守るとともに、私自身だけでなくFEST TOKYOがより良い方向へ
向かえるように尽力します。

まだまだ未熟な私達ですが、
FEST TOKYO17期もどうぞよろしくお願いいたします。

17期代表 古賀玲菜











最後まで16期活動報告書をお読みいただきありがとうございました。
本書が皆様にとって意味のある報告書になっていたら嬉しいです。

FEST TOKYO16期　一同